
とある科学の完全調整（フルチューニング）

うきせくさこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】 とある科学の完全調整フルチューニング

【ZZコード】

Z8634W

【作者名】

「つきせくわい」

【あらすじ】

起きたら裸で見知らぬ殺風景な部屋。しかも女になってる?!白衣の男にミサカ00000号フルチューニングと呼ばれる。ミサカ?フルチューニング?取り合えず裸見んな!

『とある魔術の禁書目録』の世界を舞台にミサカ00000号に憑依した男の死亡フラグ回避ストーリー

第一話

田を覚ますと真っ白な部屋だった。自分の家には、こんな部屋なんてない。

寝ぼけた頭で昨日の事を思い出す。昨日はたしか自室のベッドで眠つたはずだ。じゃあここはどこなんだ？

辺りを見回してみる。いかにも病院とかで見かけそうな機材（脈拍やら脳波測りそうな機械）やらが周りにあって、生活感のカケラもない。

もしかしてここは病院で、寝ているうちに運び込まれたんだろうか？

取り合えずベッドから起き上がる。てか服着てないじゃねえかと、視線を下げる。寝ぼけた頭が完全に覚めた。

20数年お付き合にしてきた息子がいない！？代わりに胸がほんの少し自己主張している。起きたら女になっていた！

「起動したか、ミサカ00000号」
フルチューニング

一人混乱していると、白衣の男が部屋に入ってきた。黒髪がボサボサつとしていて体格がヒョロッとしたいかにも研究者な中年の男である。

さて混乱している俺はこの時どんな答を出したか？

氣付いたら女になっていた 白衣の男は何か知つてゐる こいつが
犯人 今の状況、少女の裸 元男と男が織り成す18禁なことをさ
れてしまつ やられる前に殺れ

普通に考えればどう考へてもおかしいのだが、混乱してゐると、女性の体になり見知らぬ男に裸を見られた嫌悪感からか、怒りが沸々と沸き上がり

と男めがけて殴りかかつた。

殴ろうと拳を突き出した瞬間、バチバチと音がなり、拳が光りはじめた。

やめろと言われても、拳はすんごく止まつたが帶びた光は止まらない。結局光が男に触れた途端、男は激しく痙攣して倒れた。あ、口から泡まで吹いてる。

改めて拳を見る。先程よりは幾分が眩しさは衰えたが、相変わらずバチバチと音が鳴っている。

これはもしかして電気か？ロリコン変態野郎による貞操の危機を前にして、能力（）が目覚めたとかいうやつなんだろうか？

そんなバカなことを考えながら、この世界の
0000号^{フルチューニング}としての日々が始まった。

ミサカ〇

第一話

白衣の男との一連の騒動は外まで響いたらしい。慌てて研究員らしいやつらが何人か駆け付けてきた。（こちらも慌ててベッドに逃げ込んだ）

白衣の男は失心したままなので、襲われそうになつたから殺つた、反省はしていない と彼らに伝えた。白衣の男が研究員に運ばれて行くとき、彼に対する視線がやや痛かつたのは仕方ないだろう。反省してこい、ロリコン。

ともかく今の状況がわからないので、着替えを持ってきた女性研究員に話を聞いてみた。

まずは「こ」は学園都市にあるラボの一つだそうだ。

学園都市というのは超能力を科学的に研究、開発を行う都市のことらしい。超能力というのは、物理法則を捻じ曲げて超常現象を起こす力なんだそうだ。先程の電気のようなものや、他にも火や風を操つたり、瞬間移動なんて能力もあるらしい。

この超能力は学園都市で脳の開発を行うことで後天的に身につくといれるのだといつ。

しかし能力は個々によって異なる上、必ずしも能力が身につくとい

うわけではない。

学園都市では、超能力を強度^{レベル}で格付けしている。

レベルは0から5の六段階で分けられている。

無能力者、あるいは能力が弱すぎる者はレベル0に分類されるのだが、これは能力開発を行つたものの6割が該当するそうだ。

そして、レベルが上がれば上がる程、相対的に数が少なくなる。

ちなみに超能力者（レベル5）は、学園都市でも7人しかいないが、1人で軍隊と対等に戦える程の力を有しているらしい。

そのため、強い能力者や能力の種類に関しては運の要素が強い。

そこにある計画が立案された。 ^{レイオノイズ}量産能力者計画である。

超能力者（レベル5）の遺伝子配列のパターンを解明し、超能力者を生み出す計画だそうだ。

つまり超能力者のクローンを作成し、超能力者を誕生させるという計画である。量産されたクローンは軍用として利用されるのが決定済み。

人道？なにそれ美味しいの？のような非人道的計画なのだ。

そして、その非人道な計画こそこのラボの研究であり、クローンの第一号である検体番号〇号 ミサカ〇〇〇〇〇〇号^{フルチューニング}こと俺なのだ。

……俺、終わつたかもしれない。

衝撃的な話を聞いたあと、しばらく呆然としていたが、研究員たちはそれに構わず、頭や体に妙な機械を付け始めた。どうやら実験体である俺のなにかのデータを取るようだ。

正直実験体になるのはごめんだし、いつのこと全部話すべきだろうか？ 実は俺は男なんだと。

……駄目だ…どうやっても廃棄処分やら解剖フラグな気がする…！ 仮にそれから連れられたとしても、普通は信じてもらえないだろう。俺だって信じられないし。

そつこいつ考えながらなされるがままに数時間ほど検査をされ、その日は終了となつた。

寝泊まりする部屋に連れていいてもらい、夕飯？として渡されたブロツク食をかじりながら、一人になつて改めて今の状況を考えてみる。

学園都市は東京にあるらしいのだが、そんな場所は聞いたことが無く、超能力とか超常現象が一般的に存在するなんてのは、一二十数年

間培つた俺の常識にはない。

つまり、ここにはアニメの世界のような異世界であるところと
。

となると親や友達と連絡をとるのは無理だろ？ 急に不安になつて
きた。

仮に外の世界に逃げたとしても頼れる相手がないし、戸籍自体も
ないから生活のしようがない。

ただ異世界に来ただけならともかく、まさか実験体に憑依するなん
て。どこぞの出来の悪いSFみたいな話である。

前に見た一次小説なんかだったら、最強な能力を持つて俺TUEE
E出来ちゃつたりするんだろうが……。

……待てよ。そういう意味では、この世界の七人しかいない超能
力者（レベル5）のクローンなんだから、もしかして俺つてどんでも
なく強いのか？

改めて電撃を放つた手を見る。流石にもう光つていない。

どうやつたら、電気を出せばいいのか たしか女の研究員が超能力は自分だけの現実が重要であると言つてたつ。

専門用語も混じつてたからよくわからなかつたが、ようは本来有り得ないことを有り得ることとして認識する 例えば俺の右手から電気が出て当たり前つて考える事なんだろつか？

…………想ひだな。意外と厨二には優しい世界なのかも知れない。でも、さつきは特に何も考えずに出来つけ。もしかすると感情は能力に影響を及ぼすのかも知れないな。

取り合えず右手に電気が集まるようにイメージしてみた。するとすぐ光りはじめ、電気を帯びはじめた。

「おおおおお！なんかすげえ！！」

思わず独り言をしてしまつほど興奮してしまつ。超能力が使えるなんて男のロマンだよな！

少し希望が出てきたな。しばらくは実験体として生活して、まずはこの能力に慣れていくつ。あくまで能力者の量産計画なわけだし、量産されるまではすぐに戦場やらに送られることはないはずだ、多分。最悪、レベル5の力があればなんとかなるかも知れない。

じゃあ寝るか。

洗面所で初めてまともに自分が憑依した少女の顔を見る。

……………これはヤバいな。顔が整つていて可愛いいんじゃないかな？幼さは感じるものの、それが相まって可愛らしさが増している。多分もう少し成長したら幼さが抑えられ、綺麗に感じるんだろう。くそ！出来れば男としてお友達になりたかった！

……………こののもナルシストと言えるんだろうか？複雑である。しかしながらロリコンや肉食系男子には気をつけよう。これは本気で貞操がヤバい。

……………女の体になつたが、いつかは男に惚れてしまつんだろうか？少し鬱になつた。

洗面所から戻り、パジャマなんぞはないから、仕方ないので服を脱ぐ。にしても、どこかの制服なんだろうがなんで制服なんだ？

下着姿になり、寝に入ろうとしたところで急に扉が開いた。

「〇〇〇〇〇号…私に刃向かうとはどうこうだ…お前はこれから再調整して……！」

……あ、なるほど。一日の〆はお前が白衣の男。裸を見た罪をあれで許そうとしたが、足りないというわけだ。負けたよ。お前は悪い意味でのロココンの中のロココンだ。

だからもひとつすごい電撃を浴びせてあげよう。これが……俺の全
力全開……ツ――――

騒ぎを聞き付けた研究員がまた駆け付けてきたが

「夜ばいされそうになつた。恐怖で能力が暴走した。これは正当防衛である（キリッ）

当然運ばれていく白衣の男への視線は皆冷たかつた。

翌日

今日も検査を行つらしい。ただ今日は定^{システィムスキヤン}『身体検査』つまり能力の測定を行うようだ。たしかに自分の能力がどれくらいなのか知つておくに越したことはない。今は知ることが大事だ。

ついでにオリジナルになった超能力者の能力とかも見ることは出来ないか。と言うと能力測定後に資料を渡してくれることになった。

なんでもオリジナルの少女は幼い頃から様々な検査を行つてているため、資料ならば膨大にあるらしい。だからこそ、その少女がオリジナルとして選ばれたという訳である。よりオリジナルに近いクローンを作るために。

測定後はある程度の自由は与えてくれるようだ。能力を自由に使っていいように訓練室も開放してくれるらしい。もつとも自由に行き来できるのは、自室とそこだけで他の部屋の立ち入りは禁止されたが。嗚呼外出してえ。

身体検査はまず電気の出力の測定から始めたことになつた。レベル5の全力を發揮すると、機器が故障するので徐々に出力を上げていくように指示される。白衣の男がいたが 何か言い足そうに苦

虫を潰したような顔でこちらを見ていたが無視した。

集中して出力を徐々に上げていく。研究員たちも、初めてクローンから能力を使つているのを見て感嘆の声が上がる。まあ実際見たのは白衣の男だけだしな。

「000000号、もつと出力をあげろ」

白衣の男に言われ、また徐々に上げていく。このやり取りを何度も行つた。しかしそろそろそこちらは限界な気がする。能力使うのって意外に体力つかうのな。ちなみに白衣の男は天井と呼ばれていた。どうやらこのラボではかなり偉いヤツらしく、ヤツを中心し測定結果が出ているであろうモニターを覗き、研究員に指示を出している。

しかし体力はまだなんとかなるが、そろそろ出力の限界が近い。

「出力が限界みたいだ。これ以上出力を上げられない」

「何……？」

天井は訝しい目でモニターを睨む。

「バカな……。超電磁砲の1%ほどだぞ。どういう事だ？」レルガン

周りの研究員も騒然としはじめる。どうやら問題が発生したようだ。俺なにか間違つたことでもやつたんだろうか？

「〇〇〇〇〇〇号、身体検査を終了する。先の資料を受け取つたら自由にしていいぞ」

そのあとも色々なことをやらされたが、天井や他の研究員の顔が陥しくなるばかりだった。なにがなんだかわからないまま俺は部屋をあとにした。

超電磁砲の1% 天井の言葉が気になる。これがキーワードだ。

渡された資料に目を通す。そこには俺の顔そつくりの活発そうな少女の写真があった。

彼女の名前は御坂美琴。能力名は『超電磁砲』。元々は電撃使い（エレクトロマスター）なのだが、彼女が編み出した技を元に自らその異名を名乗つているらしい。クローンである俺のオリジナルに当たる少女である。まさかオリジナルが厨二病を患つているとは。クローンの身としては嘆かわしい。

つまりレールガンとは兵器ではなく、彼女のことだろ？。

「こう」とは、今の俺の力はオリジナルの力の1%ぐらいうこうとか？！おいおい俺TUEEEEフラグがポツキリ折れたぞー！そのかわりに廃棄処分という名の死亡フラグが！！

待て、まだ慌てるような時間じゃない。素養はあるんだ。
能力を上げればいいんじゃないかな？

資料にはオリジナルは元々レベル1の能力だったが、様々なカリキュラムを経てレベル5になつたと記載されている。となると訓練次第では能力は上がるはずだ。

レベル5ではおよそ10億ボルトもの電撃を放てるようだ。これの1%となると俺が使える電撃は1000万ボルトか？ピカチ○ウ越えたな。

てか、オリジナルは化け物か？某海賊漫画の悪役雷人間より凄いんじゃないかな？

オリジナルのデータだと、だいたい俺の能力はレベル3に相当する。となるとオリジナルよりは早く上げられるかもしれない。

よし、早速特訓だ！存在価値を高めて廃棄処分は免れるんだ！！

訓練室はかなり広い空間だつた。

まずオリジナルの能力がいくつか資料に載っていたので、レベル3でそれができるのか試してみよつ。ちなみにいくつかは身体検査のときによつたしな。

まずは電撃の槍。高圧電流を槍のようになに飛ばす遠距離系の技だ。これはなんなくできた。射程に関しては、20～25m程でそれ以上になると消えてしまう。威力も距離が遠ければ遠いほど下がるようだ。オリジナルは視界内すべてが射程範囲らしい。

落雷を誘発できるようだがこれは外でないとできないからパス。使うときになつたら絶対ラ○ディンって唱えてやる。

次に磁力の操作だ。電磁力を利用した技で、オリジナルは砂鉄で剣を作つたり、砂嵐を巻き起こした攻撃的な使い方や、一時加速、浮遊の移動手段としての使い方、レーダーのような空間認識など幅広い扱いが出来るらしい。

訓練室はそうした訓練も想定してか、幸い砂鉄やら鉄板も置いてあつた。

磁力を利用した引力と斥力をやってみよつ。まずは引力、鉄板が宙に浮き手に収まつた。なんかスター・ウォー○でジ○ダイがライトセ

○バーをフ〇ースで引き寄せるのを思い出すな。斥力も問題なくできた。

しかし砂鉄の剣は難易度が高いようだ。オリジナルは磁力線を目視できるらしいが俺はできないので、剣の形にするのも難しかった。

なんとかそれらしい形にしていざ鉄板を斬ろうとしても砂鉄の剣と鉄板が磁石のようにくっついただけである。表面を振動させることで切れるらしいのだが。そこまでの制御はどうやら無理そうだ。磁力線が見えればなんとかなるかもしれないが。一度、天井たちに相談してみるか。

砂嵐は簡単だった。ただ想像していたよりショボい。人が2～3人だけ入れるぐらいのつむじ風だった。視界を遮るのには役に立つか？

次は加速を試してみる。磁石みたいに引力や斥力を利用することで実現できた。ただ一時的なのがなあ。緊急回避には便利だろうが常時使えないもんだろうか？こう身体強化的な。

あ、そういえばあつたぞ、漫画の技だけど。たしか某狩人×狩人で暗殺一家の三男が使つてた技だ。末梢神経を電気で操作して速度や反射速度あげたりしてたつて。やってみるか。

……複雑な神経を操作するためかなり制御が難しかつたができた。今なら小足みて昇竜余裕な超反応をリアルでできるだろう。ただ課題としては制御が複雑なため攻撃を同時に行つたり、磁力利用の移動の併用は無理みたいだ。しかしこれは使える。ありがとう暗殺一

家の少年よ。これで俺はまたひとつ強くなれた。漫画・アニメの技は参考になるかもしね。くつ、燃えてきたぜ俺の妄想力が！いつか全部実現してみせる！

浮遊は広い空間のこの場では試せなかつたので磁力を利用した壁登りをやつてみた。気分は蜘蛛男である。しかし、スカートが短いせいでパンツまる見えだな。スパツツかなんか買つてもらおう。俺は痴女じやないし。

他のオリジナルが使用する能力については、今日はやめることにした。例えば誘導加熱による加熱　　いわゆるレンジでチンするアレだが鉄板とかやつたら危ないだろうし、レーダーやパソコンのハッキングなんかは対象や機器がないとできないので天井たちに許可を得ないと必要があるからだ。

最後にオリジナルの異名ともなつた超電磁砲を試してみる。これはレベル5ではじめて使える技のようだから、できない可能性が高いが。

超電磁砲はコインを弾丸として用い、指で弾く形で撃ち出し音速の3倍以上で放つ。軌道上にある物を全て難ぎ払うという恐ろしい技だ。空気との摩擦熱でコインが溶けてしまつたため射程距離は50mとそれほど長くないが、弾丸の質量を変えれば威力や射程を伸ばすことができるらしい。実際の硬貨を使つたら、貨幣損傷等取締法に引っ掛かる技だな。人にむけて使う技では絶対にない。

で試してみたのだが。コインを飛ばすことは出来た。普通に飛ばすよりは強いだろう。辺り所が悪ければ、気絶ぐらひはできそうである。しかしコインは溶けないし、速さも音速を越えた氣はしない。これなら電撃の槍か銃のほうが強いだろう。

一通り技を試し、復習しようとしたところ電撃が出なくなつた。焦つたがどうやら電池切れという現象のようだ。ゲームによくあるMPがされた状態なのだろう。休憩すれば時間とともに回復するらしい。

仕方がないので、普通に身体を鍛えることにした。オリジナルは能力も凄いが、身体能力や知力も凄いというパーソフェクトな存在なんだとか。それらの要素も能力向上に関係しているようだし、軍に回されるかもしれないから体も鍛えないと。勉強に関しては天井たちと相談だな。どういった知識が必要なのかわからないしな。

やるいとは多いが生き残る為に頑張るぞ…………。

一週間過ぎた。

目が覚めても、元の世界に戻るなんてことはなく、慣れない日々を過ごしている。両親は元気にしているようだらうか？あなたがたの息子は少女になつて今料理しています。

きっかけはこちらの世界にきて三日目のことだつた。それまで出てきた食事が全てブロック食である。なんだよ、プレーン チョコ チーズ フルーツつて！ループに気付いた時、流石にキレて天井（ちなみに名前は亜雄）に電撃かましてやつた。

で交渉した結果、調理場（なんでラボにこんなのがあるんだ？）を借りて料理することになったのだ。料理ができるなら、今後自由に調理場を使用できる許可と買い物限定の外出許可付きで。天井は料理できるように調整していいからできるわけがないと高をくくつているようである。

だがしかし、元の世界では学生時代から一人暮らしをしていたこともあって多少なりに料理はできるのだ。完成した料理を見て呆然とした天井に思わずドヤ顔したのも悪くはないだらう。

出来も悪くは無かつたので、食べるか？と天井に聞いたところ、天井は人形が作ったものを吃えるか！と捨て台詞を吐いて去つていった。あの野郎。いつかあいつのパソコンにエ 10ve 101i t aつて壁紙に変えてやる。

実のところ、俺が人形扱いされるのはなにも天井だけではない。ここにいるほぼ全ての研究者は似たり寄つたりな認識のようである。前の夜ばいの件も少女に手を出した天井は変態であるというよりは、人形にまで手を出す天井は異常性癖者であるという認識なのだ。まあ、どちらにしても天井は変態なわけだが。

まあそんな訳で、あまり深く関わることがない。必要最低限しか話さないし、名前を覚える機会がない。

……正直に言うとかなり凹んだ。人間扱いされないことに。友達も出来ない。ひどく孤独なのだ。量産型能力者計画が進めば、同じクローンの子が増えるのかな？ そうなると俺から見れば妹みたいな存在になるんだろうか。そいつらにはこんな孤独な気持ちは味あわせたくない。なるべく優しくしてあげよう。姉として。

なお、天井は違う意味でぼっちである。研究者としては一目を置かれているものの、あまり好かれてはいないようだ。この間も研究員たちが互いに誘い誘われ食事に向かう最中、一人だけ誘われてなかつたし。少しだけ俺の憐憫を誘つた。

かなり話しがずれたが、まあそんなわけでひょんなことから外出許可と料理する権利を得たのである。

それから、身体検査は順調だ。徐々にではあるが、電撃の出力は上がっている。天井も何故クローンがレベル5にならないのかは疑問

に思つてゐるようだが、能力向上の結果は喜んでゐるらしい。能力が強いと脳の演算処理が早い、つまり頭がいいということを聞かされ、憑依した俺の知能の問題かとも思つたが、どうやら別問題のようだ。

訓練や勉強に関しても順調である。訓練は漫画の電気や雷を使う技を思い出しながら試してみたり、前回試せなかつた能力に関してもやることができた。

勉強に関しては、実は洗脳装置テスマントと呼ばれる装置で、既にオリジナルと同程度の知識を有してゐるらしい。軍事利用も考へてゐるため、銃の使い方なんてのも学習済みなんだとか。んなバカなと思つて英語の本を見ても普通に読めるし、訓練室で射撃も出来た。洗脳装置すげえ。元々の〇〇〇〇〇〇号の人格も洗脳装置で天井が調整していつものだそうだ。ただ今の〇〇〇〇〇号の人格にはならないはずだと、首を傾げていたが。……まあ、普通憑依するなんてのは気付かないよな。

そんなこんなしていると瞬く間に一週間過ぎたのである。

朝食を済ませたあと、検査が始まる。これは日常のスケジュールと変わりない。ただ今日は一つだけ違うことがあつた。見知らぬ女性がいる。誰だろうか。

ウェーブのかかつた黒髪のギョロツとした目が特徴の若い女性だ。こういつてはなんだが暗がりで見かけたら、心臓に悪いかもしだい。視線があつたので軽く会釈した。

「probably、あなたが〇〇〇〇〇号かしら?」

「ああ、 そ う だ が あ ん た は ？」

「 布 束 砥 信 よ 。 よ り し く ね 」

「 あ あ 、 よ り し く 」

こ こ に 来 て 、 初 め て 挨 捶 ら し い 挨 捶 を 交 わ し た の で 、 ニ ツ コ リ と 笑 い か け る 。 一 瞬 、 い き な り 英 単 語 が 出 た の で 前 は ル ー 〇 柴 か と ツ ツ 「 コ ミ た か つ た の は 内 緒 だ 。 キ ャ ラ 作 り に 悩 う で い る の か も し れ な い 。 安 心 し ろ 、 外 見 は 立 派 に キ ャ ラ が 立 つ て る か ら 。 で も 気 に し て る カ も し れ な い か ら 黙 つ て お こ づ 。

布 束 砥 信 は 、 あ ら た ま め て こ ち ち う に 笑 顔 を 向 け る 彼 女 0 0 0 0 0
0 号 の こ と を 考 え る 。

（ 本 当 に 感 情 が 豊 か 。 B u t 、 こ れ は ど う い う 事 ？ ）

本 来 天 井 亜 雄 が 施 し た 人 格 調 整 で は 、 従 順 で 大 人 し く 感 情 が 表 に 出 な い 人 形 の よ う な 性 格 に な る ば ず だ 。 元々 、 彼 女 は 洗 脳 装 置 の 監 修 を し て い た 実 績 を 買 わ れ 、 この 計 画 に 参 加 し た 外 部 ス タ ッ フ だ 。 そ の 彼 女 か ら 見 て も 、 天 井 の 調 整 に 問 題 は な か つ た 。 だ が 0 0 0 0 0 0
0 号 は 全 く 違 う 結 果 を 見 せ て い る 。

(本当に作り物なの?これではまるで)

布束は頭に過ぎつた言葉を搔き消した。それを認めてしまえば、研究の根幹を問うことになる。

そんな事を考えながら、ただ彼女を見つめ続けた。

第六話（後書き）

布束砥信さんの口調は難しいですね。

第七話

ギヨロ田ちゃん事、砥信さん　　外見では自分が年下だからそう呼んでいる、とはよく話すようになった。外見だと年が割と近かつたし（高校生らしい）、礼儀には煩い人だけど意外と話しやすかつたりする。砥信さんはその歳で洗脳装置の開発に関わったスペシャリスト。その関係で、量産型能力者計画の妹達（シスターズクローンの総称）の人格調整を担当しているらしいんだけど、元々の計画のメンバーではないため、天井からはいい顔はされていない。

「砥信さん、砥信さん、お昼一緒に食べない？」

「ええ、いいわ」

今では昼食も食べる仲だ。

「Well、明日他の妹達が完成するのは聞いてる？」

「え？ いやまだ聞いてないよ」

「どうか、とうとう他のクローンが生まれるんだ。どんな子なんだろうな。」

「Incidentally、この研究所で5体、他の研究所でも10体以上造られる予定よ」

「え、他の研究所でもこの研究やつてるの?」

「ええ、様々なデータの収集は必要。besides、計画終了後のことも考えての事よ」

つまり軍事利用のための量産体制の下地も整えておくつて事か。

「誕生する瞬間とか立ち会つてみたいなあ」

「それは天井に聞かないどダメね」

あとで天井にダメ元で話したら、すんなりと許可を得た。なんか機嫌がよかつたみたいで、こぼれる笑みを隠しきれていなかつたし。なんでだ?

培養液と思われる液体が詰まつたポッドが沢山並んでいる。そこには同じ顔した少女たちがいた。中にはまだ俺より幼く見える子や赤ん坊みたいな子もいる。

「よし起動しろ」

天井の司令とともに液体が排水され、ポッドが開く。すると全裸の少女が重力に負けてかペタンと座り込んだ。しばらくは呆然としていたが意識がはつきりしだすと、状況を理解出来ないのか、キヨロ

キヨロと辺りを伺つ。

か、かわいい…………！……なんだこの生き物！…………！パネえ、妹達パネえ！これを軍事利用とかありえないだろ、常識的に考えて！！

そう興奮していると、少女はワンワンと泣き始めた。仕草だけみれば完全に赤ちゃんである。

少女は研究員たちとともに別室に連れて行かれる。恐らく、洗脳装置による学習や人格調整を行うんだろう。作業は翌日までかかるようだ。1日かかるとはいえ調整つて意外と早く終わるんだな。

翌朝目が覚めると、なにかがおかしい。誰かに見られているような、何かが繋がっているようなそんな不思議な感覚だ。流石に異常かも、しれないと思ったので天井に相談した。

「ああ、それはミサカネットワークのことだろ？」

「ミサカネットワーク？」

「脳波リンクのことだ。妹達は全員同一の脳波であり、能力も電気操作能力だ。これを利用して、脳波を電気信号として発信し、意識や思考、経験などの情報を共有できる。ただし許可した情報であればな。理論上では、記憶のバックアップや演算の並列処理なども可能なはずだ」

なるほど、ようは妹達内限定のインターネットとか。といふ
か、こんなにできる天井を見るのは初めてだな。

「ネットワークを利用した会話もできるはずだ。すでに検体番号5
号までは稼動している。試しておいてはどうだ?」

なるほど、んじゃ早速。

あー、テスヌス。こちら〇〇〇〇〇〇〇号。聞こえていますかー?

(「こちらは検体番号1号です、とミサカは応答します」)

(「こちらは検体番号2号です、とミサカは応答します」)

(「こちらは検体番号3号です、とミサカは返事します」)

(「こちらは検体番号4号です、とミサカは返事します」)

…………Jの口調は妹達内で流行りなんだろ? 調整の影響かな?

ミサカネットワークのテストで会話してみただけなんだがな。
まあ何かあつたら連絡しようぜ。あとで直接会えるやつもいるだろ
うけど、今後ともよろしくな。

(『よろしくお願いします、ヒミサカはお願いします』)

ネットワークに問題はなさそうだ。

「問題なく会話できたよ。そういうえば他の妹達は？」

「これから身体検査中を行つ。お前もついてこよ。妹達と直接対面できるのか。やつたね〇〇〇〇〇号、家族が増えるよ！」

外見も服も同じ。びっくりなほど見分けがつかない五つ子が検査室にいた。ミサカネットワークのおかげで各人の検体番号がわかるので識別できるが、無ければ見分けられる自信がないな。それにしてもみんなして無表情だな。

「よお、俺がわざわざ話した〇〇〇〇〇号だ。改めてみんなよろしくな

『よろしくお願いしますとミサカは答えます』

ペコリと無表情で頭をさげる妹達。かわいいけど、あまり感情を表に出さないんだな。はじめての顔あわせで緊張してるのかな。ちようど傍にいた砥信さんに耳つちしてみた。

「砥信さん、あの子たち緊張してるのかな？さつきから無表情だけど

「緊張？有り得ないわ

え？有り得ない？

「そもそも喜怒哀楽などの感情は全て妹達にはないわ。元々感情は洗脳装置の調整に含まれていらないもの」

え? じゃあそれって?

「妹達は感情がない。……人とは違うのよ」

その一言はさきつと胸に響いた。

あれから砥信さんは余り話していない。話していると気まずくなってしまい、どちらかが会話を終わらせるからだ。

聞いた当初は、砥信さんも他のやつらと同じように俺を含めたクローンを人間のように思っていないのかと絶望した。知り合って一ヶ月も経つてないけど、友人だと思ってた人の一言はそれだけ重かったのだ。

しかし今は落ち着いたので、冷静に考えることができる。今までの砥信さんと話をしてきた感じは、少なくとも他の研究者たちとは違うものだったはずだ。だからあの言葉はむしろ……。

けれどそれを肯定できるだけの確証がない。聞けばいいんだろうが、正直いうと怖かったりするのだ。否定されるのが。俺や妹達は人じやないと言われるのは。だから悶々とした日々が続いている。

そんな悶々とした気持ちは関係ないとばかりに、ミサカネットワークは徐々に賑やかになってきている。

この研究所では見かけないが、他の研究所でどんどん妹達が誕生しているようだ。今確認しているだけでも50人を越えている。確認される度に挨拶をネットワーク経由で送った。他の妹達も挨拶したり頻繁にネットワークを利用しているようだ。

うちの研究所にいる妹達を見る。このところよく一緒になるようになつた。

相変わらず無表情で、笑つたりすることはない。一緒に訓練してみたり、料理を手伝わせてみたり、食べさせてみたりするがあまり反応はない。何か食べたとしても美味しい、まずいといった感想は出るのだが、あくまで淡々としている。

砥信さんのいうように感情といつ概念は本当にはないんだろうか？妹達にも聞いてみたが結果は砥信さんと一緒にだつた。だが自分にはどうしても信じられない。

どちらかといふと、感情がないのではなく育つていらないだけなんじやないかと思うのだ。赤ん坊の頃は泣くか笑う それだけじゃないけど といった、単純だがはつきりとした感情を表に出しやすい。だが、人は成長すれば色んな経験を経て感情はより複雑になり、抑えられるようになる。

妹達にはそう言つた経験がない状態で成長させた。だから感情は抑える部分だけがいびつに成長してしまい、それが弊害になつて感情が育つていかないのかもしれない。まあ、これは全て憶測に過ぎないが。

幸い妹達は好奇心が旺盛だ。昨日も料理の仕方を学習してたつて、うまくいかずに焦げた物体を食べたりしたけど。

知識はあるが経験はない。それはそうだ、中には昨日生まれたばかりの子もいるのだから。だから、きっと時間が経てば感情が芽生えるはずだ。

計画が終了する前には感情が芽生えて欲しいな。そして砥信さんや他の奴らに俺を妹達の事を認めてもらつんだ　妹達は人として生きているんだって。

人して認められたら、研究者たちも今の計画について思い直していくのだろうか。そんな飛躍した考えが頭を過ぎる。量産型能力者計画の計画を軍用じゃなくて平和的な利用に変えてもらいたいのだ。例えば、学園都市内の警察みたいなものに協力するとかいいんじやないか？学園都市は超能力者ばかりだし、悪用するやつだつているだろう。だからきっと学園都市には警察のよつな組織が存在するはずだ。そこに妹達全員雇つてもらうのである。

電撃なら相手を傷付けずに取り押さえれるし、ミサカネットワークを使えば犯人追いかけるのに役に立ちそうだしな。

まあその考えは飛躍しすぎか。実現は難しいかもしれない。けれど、研究者があるいは軍関係者が、妹達を人として見てくれたら、人形として扱われるよりも、危険で粗雑な扱いをされにくくなるだろう。

そんな日がくればいいな。そう切に願つた。

けれど、俺達を取り巻く状況は嘲笑うかのように急変するのである。

〇〇〇〇〇〇号ですが、研究所の空気が悪いです。

何故空気が悪いのか。それは研究が芳しくない というか問題が発生したからである。問題とはなにか？それは妹達の能力のことである。

妹達の能力は身体検査の結果が、レベルは3または2であったからだ。（ばらつきに関しては個体差があるらしい）

元々俺に関しては完全な試作品、つまりクローランを生産するに当たり不備や不具合がないかどうかを確認することが意味合いが強い実験動物だったそうだ。

そのため、レベル5として生まれてこないという問題は発生したものの、クローランを生み出す理論は確立したので、あとは問題を分析し解明すればいいだけの話である。オリジナルや俺の検査結果を比較し、不具合の原因と思わしきデータを調整し直す。そんなフィードバックを繰り返せば、妹達はレベル5として生まれるはずだつた。だが結論はレベル5にならなかつた。想定される不具合を全て修正した上、50体以上の素体で試したものの、当初の想定とは違う結果を見せたのである。計画の進行が停滞してしまつたのだ。

そのため研究員たちは険しい顔をしていり、天井も上司への経過報告などで忙しいらしい。

「でもしクローランがレベル5にならないと言つたことが確定したら、

量産型能力者計画は凍結し、俺達の廃棄処分は覆せないだろつ。

残る可能性は能力の成長だ。オリジナルがそうであったようにクローンもまたそうでは同じなのではないか。

この間俺はようやく身体検査でレベル4と診断された。そもそもオリジナルが成長できたから、成長できるのではと軽く考えていたが、レベル3からレベル4にシフトするのも成功例は少ないそうだ。ただその結果、オリジナルのようにカリキュラムをこなせばレベル5になれるのではないかという可能性が強まつたのである。

後天的な学習で成長が可能ならば、軍事利用で考えれば即戦力にならないのは問題になるかもしれないが、レベル5は7人までしかいない希少価値も考えると十分に検討に値する。

まあ問題がないわけではない。

それはレベル5に到達するまでに要する時間だ。ちなみにオリジナルでもレベル4からレベル5になるのに年単位で時間をしているのだ。それ以上かかる可能性がある。

それに妹達が個体によってレベル5に到達できない可能性もある。量産型能力者計画は偶発の産物であるレベル5を確実に生み出し量産する事が前提だ。これが偶発となると話しが変わる。

そもそも理論が崩れた以上、本当にレベル5になれるのかどうかも不明なのだ。

できるかできないかわからない事のために何年も費やす事は難しい。研究にも資金が必要だ。できない可能性の高い研究は凍結されるだろつ。

だが、なにか確証となるものがあれば別である。

学園都市にはそれを可能にするものがあった。それが樹系図の設計者だ。シリーズ・ソーダイア

これは正しいデータさえ入力してやれば、完全な未来予測ができるという超高性能コンピュータなのだ。樹系図の設計者が弾き出した結果は学園都市内で確定事項となるため、クローンがレベル5になれるとなれば、研究の継続は確定する。

樹系図の設計者はすぐに使えるわけではない。使用権限は学園都市の上層部の許可が必要になる。そのため天井は上司を通じて随分前から申請していたようで、すでに研究データを渡しており、あとは結果待ちである。

「とうとうわけです、とミサカは簡潔に説明します」

「ふむ成る程な」

ちなみに今までの説明はミサカ1号たちと俺が情報を補完しあつてまとめてくれたものである。

今までわからないことは砥信さん経由で聞いていたが、砥信さんとはまだ仲直りできていないし。あ、なんだか悲しくなってきた。

「何と言つかまじでやばい状況なんだな」

「計画が凍結しても、他の計画に召集される可能性もあるのですぐ様廃棄処分はせず、培養器で保管されるだけではないでしょうか。もつともそのまま処分される可能性もありますが、とミサカは推察します」

寝てたら処分か。うわ、まじで怖いわ。想像して身震いするくらい。みんなは自分が廃棄処分されることについてどう思つてるんだろう。

「怖いことうなよ、3号。お前達は廃棄処分が怖くないのか?」

「000000号、前にも言いましたが、妹達に感情という概念は存在しません。だから怖いと言つ意味は知つても理解はできません、とミサカは物覚えの悪い00000号に呆れながら答えます」

…………たまにこいつら意地悪だ。砥信さん洗脳装置で悪口をインストールさせたんだろうか。

「00000号は何が怖いのですか、とミサカは首を傾げながら尋ねます。そもそも計画が凍結した場合、私達の存在意義も失われるのですから処分は最善であります、とミサカは述べます

存在意義か。

「そりゃ死ぬんだから怖いに決まってる。死ねばやりたいこともできないうだろ」

「やりたいことですか？」とミサカは疑問を投げ掛けます

「おう、自由に外出できないから、自由に外にも出てみたいしな。買い物のみしか出られないから、学園都市の一部しか知らないし」
学園都市は他の都市と比べて数十年先を進んでいる最先端の都市なんだとか。きっと珍しいものがありそうだ。

「それに計画だけが全てじゃないんじゃないか。だいたい存在意義が無くなったら死ぬ殺すなんてのもおかしいだろ。その理屈でいけば天井たち研究者だつて研究できなくなつたら、処分になるぞ」

「ですが彼らは人です、とミサカは反論します

彼女たちも、人と妹達は違う生き物と考えているようだ。だが違つてなんだ？

「じゃあ聞くが4号、俺達と天井たちとの違いはなんなんだ？感情の有無か？クローンだから違うのか？感情や生まれだつて人それぞれ違うだろ。だつたら大差ないんじゃないか、俺達は」

「やはり〇〇〇〇〇〇号は変わっています、ヒミツサカは正直に伝えます」

妹達はそう答えるながら、少し何かを考えているようだつた。

本当はもっと時間が欲しい。彼女たちが考える時間を。けど、それには時間が足りない。このまま停滞して時間が稼げればいいんだが。そんな願いも虚しく、樹系図の設計者の結果が出たのは数日後のことだつた。

その日、量産型能力者計画の凍結が決定した。

第九話（後書き）

次話辺りから徐々に独自設定やら乖離があがくなつていいくと思ひます。

第十話

1・妹達の能力は『欠陥電氣』である。レベルは3または2（個体差による）であり、それ以上進化できない。

2・000000号のみレベル5に進化できる。レベル5に進化するには、超電磁砲がレベル5に進化したカリキュラムで15年を要する。

3・000000号及び妹達の耐用年数は10年であり、レベル5に進化することは不可能である。

上記の結果から、量産型能力者計画は実現不可であり、計画を凍結する。

これが樹系図の設計者から導き出された予測演算を元に上層部が下した結果だった。

「理論に問題は無かつたはずだ！だが、何故ダメなんだ！」

妹達がレベル5になれない、計画の凍結が決定した日、研究者たちは多いに荒れた。

学園都市が誇る最高の超能力者。それを量産できる偉業。都市内でも一流の科学者たちを集めた計画。成功するはずだった。科学者として後世に遺る偉業をなしどう輝く未来になるはずだった。

だが結果は欠陥だらけの能力者を生み出しただけ。こんなガラクタならば学園都市には吐いて棄てるほどいる。

唯一の成功例も進化する想定していた耐用年数を越えた年数が必要になる。これでは成功例とは言いづらい。しかも元々試験体で造られた素体が成功例だなんて、飛んだお笑い草だ。

故に心は荒む。そしてそれを晴らす矛先を探す。欠陥の烙印を押された少女たちが選ばれるのに時間はかかるない。研究対象であるため直接手を上げるものはいなかつた。しかし、出来損ないや欠陥品と口汚く罵る言葉は全て少女たちに向けられる。

そんな悪意に包まれた中、その言葉すら届かない少女がいた00000号のことである。

計画凍結したと同時に余命を宣告された00000号です。あはは

ははははは、なんだこれ、もう笑うしかねえ。

絶望した！この世界の厳しさに絶望した！

非人道な計画、軍事利用、廃棄処分、最後は寿命短いとか死亡「フラング乱立しそぎだろ！この世界はどんだけどなんだよ、バフ・リンだつて半分は優しさで出来てんぞ！！胃腸に優しい成分だがな！！！もつと命大事にして下さい！！！！あまりの酷さに錯乱したじゃねえですか！！！！！

あー逃げ出そーか、こんな所。廃棄処分も考えられるしな。

よし、こんな時はミサカ会議だ！　　説明しようつーミサカ会議とは、ぶつっちゃけミサカネットワークを使った妹達との会議である。議題はみんなで研究所から脱走するか否かだ。

投票結果	
賛成	1
反対	50

圧倒的……ツ！圧倒的否決ツ！！

以下、主だった妹達の反応。

「ミサカネットワークに存在する限り、居場所はすぐ見つかります、ミサカは無知な〇〇〇〇〇号に忠告します」

「〇〇〇〇〇号は能力が強いので成功する確率は高いですが、他の研究所は警備員に捕まる可能性が高いです、とミサカは妹達を見捨て

てる〇〇〇〇〇号の非情さに感心します

「そもそも逃走後の計画が不明瞭です。戸籍も無しに生活は出来ません、とミサカは計画の無謀さを指摘します

フルボツコである。妹達は手加減を知りませんね。お姉ちゃん悲しいです。

その日、俺は枕を涙で濡らした。

計画凍結になると、研究所は機密保持のため閉鎖される。しかし研究に使われた器材の片付けや資料の整理があるので、すぐには閉鎖されなかつた。片付け作業には俺や妹達も狩り出された。

だがそれも長続きはしない。次の研究が決まり研究所をあとにする者も増え、次第に研究所は閑散となつていつた。

ミサカネットワークで所在のわかる妹達も徐々に確認が取れなくなつていつた。閉鎖中は次の研究が決まるまで全ての妹達は培養器に保管されるせいだ。もう今は二桁をきつていてる。うち五人はこの研究所の妹達だから、もう他の研究所もほとんど閉鎖したのだろう。

今日は砥信さんが研究所を去る。……もう会えなくなるかもしけないから、最後くらい仲直りして別れよつ。

「砥信さん」

声をかけると、彼女が振り返る。ちやんと顔を見るのはいつ以来だ
るつ。

「お疲れ様でした。色々お世話になりました」

ペコリとお辞儀する。最後くらい礼儀正しく。始めの頃は目
上だから敬語にしようと言われたが、天井ですら敬語じゃなかつたの
で彼女が折れたのもいい思い出だ。

「…………」

彼女はなにも答えない。

「じゃあ、やよひなう」

その場をあとでよひなうとした時、

「待ちなさい」

砥信さんが呼び止めた。

「私は今でも妹達は感情がないと思つてゐるわ

息がつまる。

「however」

砥信さんは少し微笑んで

「いつか感情が芽生えると思つわ」

そう言つてくれた。

「どんな研究になるかわからない、nevertheless、必ずまた会いましょう」

もちろん俺の返事は笑顔で

ああ、またな。

培養器に入る。保存液に浸かるまで妹達と話した。今度起きる時までにやりたい事見つけるとか、本当に取り留めのない話しだ。保存液が満たされていく。徐々に意識が保てなくなる。

今度起きる時は砥信さんが妹達を人として……見ててくれる。妹達も……きっと感情が芽生えて……人として……生きるだろう……。次起きる時は……きっと……幸せに……。

第十話（後書き）

とある科学の完全調整・完

次回の00000000先生の活躍に期待下さい！

いやもうちょっとだけ続くんですけどね。

研究所の一室。一人の男が黙々とキーボードを叩く。

部屋の主が神経質な性格の為か、膨大な書類があるにも関わらず、机上は整然としている。その書類に目を通しながら、ただひたすらにキーボードを叩いていた。無機質だがやけに規則正しい音が部屋に響く。入力を終えたのか音が止み、男 天井亜雄はモニターに視線を移す。

そこには「超能力進化（レベル5シフト）実験計画書」と表示されていた。

量産型能力者計画が凍結して早一ヶ月が過ぎた。

非公式な実験ではあつたが、学園都市の一部の科学者では非常に注目された研究内容だった。結果は失敗だったが、クローン技術の確立、そして妹達と成果物もある。

そのため計画を再利用できないか様々な検討がなされた。そして二つのプランを実施することが決定した。

その中のプランの一つ。それが「超能力進化実験」である。

内容は決して公表できるような代物ではない。しかしこれらのプラン

ンが成功すれば、量産型能力者計画など及びもしない名聲を得られるだろう。

だが、今回は前回のような失敗を重ねる訳にはいかない。そうなれば学園都市での研究者としての地位は失われる可能性が高い。

計画に穴がないかどうか確認するため、何度も何度もモニターに目を通す。

前回の計画は、妹達が欠陥品であると特定されるまでに、時間がかかってしまった。計画の事前に樹系図の設計者が使えば早期に計画の失敗がわかつたかもしだい。しかし妹達の実測した能力データが無ければ、そもそも樹系図の設計者が演算できなかつたのである。

だが、今回は違う。前回の結果を元にして、事前に樹系図の設計者の予測演算も行つているプランだ。実験が失敗するはずがない。

勿論、だからと言って対策を取らないわけではないが……。天井は前回の計画から非常に慎重になつていて。もう後がないのだからこそ、万全を期す。

夢を見ていた。憑依する前の子供の頃の夢。

当時小学生だつた俺は、この頃は余り人と話すのが得意じやなかつた。それが特別親しい友達なんていなかつた。それが災いしたのだ

るつ。つかず離れずいた距離が次第に離れていく級友。いじめに発展するのはその距離が無視できないほど広がっている。 そう自覚した時だった。

最初はいわゆるからかいの対象だった。次第にエスカレートし、所謂いじめのテンプレートな展開で物が無くなる、暴力は振るわれる、距離を置かれる、陰口を聞こえよがしに叩かれるだ。そして最終段階はいなかつたことにされ　　存在を否定された。級友や担任からすら。

早い時点で親に相談していたらよかつたのかもしれない。だが、それより先に心が折れてしまつたら、反抗する意志すら無くなつてしまつたらあとはされるがままだ。まずいじめる側は、反抗する意志を潰しにかかる。

子供が考えつく、できる対応なんてたかが知れている。親に話すか先生に相談するかだ。親に話そとすれば暴力で脅され、担任はいじめが存在すれば責任を負わされるため、見て見ぬフリをする。休み続けるには、転校するには親に理由を言わなければならぬ。どんどん追い詰められていく。周りから無視され、自分は無価値で生きるべきではなんじやないかと思つてさえいた。

幸い俺は他の教師がいじめに気付き、親が助けてくれ、そのまま転校となつた。

さらに幸運なことに次の学校で友達ができ、親と友達に支えられたから立ち直ることができた。

あの頃の自分と妹達はある意味似ている。周りから人扱いされないとこひ、計画が凍結し、実験体の立場がなくなつたことで処分されても構わないと自身の価値を蔑ろにしているところとか。だから彼女達をなんとか変えたいのかもしない。あの頃助けてくれた人達のようだ。

だから変えるんだ。

少し光を感じる。次第に眩しく感じて意識が覚める。ビリやら培養器の中だ。……処分はされなかつたらしい。

培養器の扉が開き、表にでる。ニヤニヤと笑う白衣の男。培養器は保護液で満たされていて当然俺は裸。

ああ、なんか凄い既視感。取り合えず一回殺つとく？

「また私に電撃を放つとは！相変わらずお前は変わらないな……！」

「いやが、少女が裸でいて、田の前にニヤニヤしてゐる男がいてみ
？どうみても変質者だつて」

想像したのか天井は顔が引き攣つた。まあ氣絶するほどのやうないよ
うに手加減したから勘弁してくれ。

「で、俺を起こしたつてことは新しい実験が決まつたつてことだよ
な。妹達も実験に参加するのか？」

手加減した理由はこいつに事情を聞くためだ。引き攣つてた顔が綻
ぶ。よくぞ聞いてくれたつて表情だな。わかりやすいぞ。

「ああ。超能力者進化実験という実験だ。妹達も使ってな
「聞く限りでは、能力をレベル5に進化させる実験みたいだが……
…、俺達は進化できないんじゃなかつたのか？もしかして、寝てい
る間に進化できる技術でも出来たのか？」

そう、進化できないからこそ以前の計画は失敗したんだ。もし進化
できるなら、その前提が崩れることになる。

「流石に計画が凍結してまだ一ヶ月しか経つていない。新技术はま
だ確立されていないわ」

「じゃあどうこいつことだ？進化する方法が思いつかない。理解でき
てない顔に天井は心底満足そうだ。いるよな、こいつの奴。

「進化させるのはお前だ。樹系図の設計者はお前のみレベル5に進
化可能と演算しただろ？」

「いや、たしかにそうだが寿命が10年しかないんだろう? 仮に寿命を延ばしても、実験に15年もかけられるのか?」

「そこで妹達を使う」

妹達? なんで「」で出でてくる?

「まだわからないか? ミサカネットワークだよ。ミサカネットワークを使って、レベル5が受けたカリキュラムを妹達にも受けさせる。そしてその経験をお前に共有させたらどうなる?」

「なるほど! ネットワークで経験値を積むのか。たしかに時間大幅に短縮できるかもしれない。だが……。」

「それでも、50人じゃ時間はかかるんじゃない? 寿命までには届きそうだけど。単純にカリキュラムを分割しても50人じゃ……」

「……」

「20000だ」

は?

「20000の妹達を使って、お前を進化させる。それが超能力進化実験の実体だ」

な、なんだって――――――！――！？――？？

な、なんだつて ！ ！ ！ ？ ？ ？

20000人の妹達に経験を積んでもらい、ミサカネットワークからその経験を共有、経験を蓄積し、00000号をレベル5に進化させる 超能力進化実験というトンデモ計画に思わず叫び声をあげた。

なにその「時間が無ければ人を増やせばいいじゃない」な発想は！いいのか？そんな強引なパワーレベリングは！

一瞬、某忍者漫画の影分身での修業風景とか、とある馬車の武器商人が馬車の中にいるだけでレベルがカンストした風景が頭を過ぎつた。

ああそういうえば忍者漫画で某上忍は雷技使つてたな。あれ今度真似しよう。…………じゃなくて。

「キバヤ…………天井、しかしそんな無茶苦茶な実験は本当にできるのか？それに20000人は予算的に大丈夫なのか？」

とかく研究にはお金がかかるのだ。妹達一人を生み出すのに18万円かかり、さらに衣食住にもお金はかかる。20000人ともなると1日だけでも相当な額になるだろう。さらに研究所の維持、科学者や警備などの人件費など雑費も考えると想像もつかない。

「ああ。今回は樹系図の設計者で事前に演算したからな、間違いないはずだ。統括理事会の承認を得て、予算も十分にあるさ」

成る程、樹系図の設計者で演算された結果は確定事項のよつなものだ。だから上層部も一度は失敗した計画の再利用を決定できたのか。天井の顔も自信に満ち溢れているな。

もし、この実験がまた非人道的な実験だつたら、流石に抵抗するつもりだつた。しかし聞く限りでは命を失つたり、軍事利用される内容ではない。流石に19950人もの妹達を実験の為に新たに生み出すのは気にかかるが。

だが生活するとなると、実験を受けるしかない。新たに生を受ける彼女達と一緒に。前の実験ではできなかつた妹達の感情を芽生えさせ、周りから人して扱つてもらうつて目標もやりたいしな。

憑依する前だつたら、クローンに漠然とした忌避感があつたが、今は違つ。どうやって生まれたかは選びようがないものだ。むしろこれからどう生きるかが問題なのだ。

だから実験を受けることにした。

「そう言えば、砥信さん…… 布束さんはこの実験に参加しているのか？」

砥信さんとの約束。できれば叶つといいんだが。

「残念だが、彼女はこの研究には参加していない。そのかわり優秀なスタッフはたくさんいるがね」

そう……か。まあいつか会えるだろつ。約束したもんな。

「ああそれから、〇〇〇〇〇〇号、これを渡しておいつ

ややゴツいゴーグルを渡される。なんだこれ？ 視力はやたらいいほうで視力矯正は必要ないなんだが。

「これは電磁波を視覚化できるゴーグルだ。以前、お前がオリジナルの能力との差異について指摘しただろつ。進化するまではそれでスペックを補う」

研究のための新装備！ そういうものもあるのかー電磁波見れるよつになつたら、また能力が増えるかな？ うーん、一度考えんとなあ。

「それからお前は、じちらが指示したカリキュラムを行つてもらう。ミサカネットを使ってはあげられない肉体的な刺激、薬物投与などのカリキュラムを優先するがな。その間に二万の検体を造りだす」

そして実験は始まつた。

まず手始めに行つたことは、既に覚醒済みの妹達のカリキュラムを受けさせ、俺自身がどのぐらい成長できるのかの確認だった。

樹系図の設計者が演算したとはい、経験を共有し、成長できるかは実際に田にしないと安心できないしな。

隣にいる3号と他の研究所にいる36号がカリキュラムを受けるみたいだ。

カリキュラムは薬品の投与や電極による刺激を与えるようなもの、それからひたすら反復作業を行うものもある。例えば透視能力のカリキュラムなんかは目隠ししてポーカーに10連続勝利するというふざけたものもあるくらいだ。

今回やるのは後者の反復作業にあたるカリキュラムで、ひたすら計測器に一定の電撃を流し続けるというものだ。一定量の電撃を流すことでの電撃の制御能力の向上、持久力の向上を目的としたもので電撃使いには基本的なカリキュラムである。しかし地味だが、電撃使いは電池切れという制限があるので長時間できないという問題もある。だが二万の妹達が交代でやれば24時間できるかもしれないな。

(じやよろしくな、3号、36号)

(わかりました、00000号とミサカは返答します)

どうやらネットワーク上で経験の共有が始まったようだ。視覚的な情報 所謂3号や36号が見ているものも見ることができるのが、今回は見ずにおくまで制御に関する情報のみ共有する。基本的にこのカリキュラムは見ることに意味はないしな。

結果はカリキュラム前と後で身体検査してみると成長している数値が出た。しかし同じカリキュラムを受けた成長率を考えると本当に微々たるものだが、まあそれを数で埋めるようにするんだろうな。

今の状況だと某有名RPGといえば、スライムから得る経験値だけでギ デイン覚えようとしてるようなもんだからな。

…………本当にこの計画つましくんどうつか？

いつもの自分の部屋。一ヶ月放置された部屋だが清掃用のロボットが掃除をしたらしく、塵ひとつない。1号たち妹達を呼んで今回の実験に関して聞いてみた。

「本来カリキュラムを受ける場合、被験者の能力に合わせて行われます。例えば今回の場合、00000号はレベル4相当の電撃を制御しますが、3号や36号はレベル3相当の電撃の制御しかできません。仮に00000号がレベル3相当でカリキュラムを行った場合、樹形図の設計者が導き出した演算結果より大幅な期間の増加が想定されます、トミサカは説明します」

「だから被験者である00000号がカリキュラムをこなすのと、妹達がカリキュラムをこなすのとでは大幅に成長率に差が出るのです、トミサカは断言します」

例えば腕立て伏せを200回以上こなせる人が日々200回やると、20回やると筋肉の付き方に差が出るようなものか。

「そつか、じゃあ樹形図の設計者の計算だと1年で進化するってのは、その成長効率を踏まえた上での結果といつわけか」

「そうなります」

成長率が低いので、カリキュラムだけじゃとても足りないのではと思つたが、それでもないんだな。

「じゃあ実験自体は一年で終了するのか。一年後はやっぱり他の実

「やつぱり他の実験や研究に参加するんだね?」

「やつぱり他の実験や研究に参加するんだね?」

「…………」

「あれ、なんでみんな黙り込むわけ?」

「なんでもありません。それよりといつもの食事はまだですかとヒサカは要求します」

「いや流石に食材きれてるから明日な

さすがに食材がないとお手上げである。今回も外出許可は取れるのかね?」

「そうですか、ヒサカは嘆息します」

「ん? どうした?」

「他の妹達と情報の共有を行つた際、食事について確認してみたのですが、錠剤や点滴で済ませているようですが、ヒサカは驚愕の情報に愕然としました」

「錠剤がどんな味か味覚を共有したのですが、余りのまことに〇〇〇〇号の手料理が如何に美味しいかと理解しました、ヒサカは食事の重要度を上方修正しました」

そつか。1号達は最初から俺が食事だしていたけど、他の妹達はそ

うなのか。俺が最初に貰ったブロック食はまだまともなほうなんだな。

「それで他の妹達が000000号の手料理に興味を示して何度も実験の共有を行っています、とミサカは現状を報告します」

「今では新たな食事が出た際、即時情報公開を要求される状況です、とミサカは現状の補足説明をします」

…………もしかすると錠剤飲みながら、手料理の情報を共有して味を「ごまかしてたりするんだろうか? 侘しい食事風景を想像して哀しくなった。これはひどい。…………妹達の食糧事情はなかなか深刻な問題のようだ。

「食事に関しては、000000号、グッジョブです、とミサカは惜しみない称賛を贈ります」

…………珍しく褒められた。仕方ないなあ、明日は「馳走作ろうかな!（これだから000000号はチョロいです、とミサカはさりげなく咳きます）

実験が始まつて十日が過ぎた。外出の許可は降りた。今回の実験は研修として妹達も外出することがあるらしい。

ちなみに外出時の服装は常盤台中学校の制服である。常盤台中学とは学園都市でも有数のお嬢様学校で、優秀な能力者が多数在籍して

いる。オリジナルもそこに通つてゐるらしい。

何故この制服なのかといつと、万が一オリジナルの知り合いに遭遇した際に「こまかすためだ。（オリジナルにより近付けるといつ意味もあるらしいが）最初聞いた時は、返つて知り合いに会うと「こまかしきれないような気がするんだが。どうやら常盤台はお嬢様学校なだけあって、校則が厳しいらしく外出時は制服でなければならぬのである。だから私服で見つかれば、返つて大事になりオリジナルに連絡が入りやすくなる。

まあなんだかんだで知り合いに遭遇することはなかつた。一二、三度同じ制服の如何にもお嬢様な娘と遭遇したが、知り合いではないようで話し掛けでは来なかつた。……まさか文武両道な完璧超人であるオリジナルがぼつちだから話し掛けられないことはないだらうが。

学園都市は広いのだ。そう知り合ひやましてやオリジナルなんて会うわけがない。

話が代わるが、学園都市は治安が悪いよつだ。治安維持のために学生で構成されている風紀委員ジャッジメントと教員で構成されている警備員アンチスキルという組織がある。

最も風紀委員は学生のためか危険度の低いどちらかと言つて交番お

巡りさんのような役回りで、警備員は危険度が高く、直接超能力者を取り押さえる役のようだ。

この間見たのは、風紀委員の子だらう。まだ小学生ぐらいの子供だつたが郵便局で強盗があり、その強盗と交戦したらしい。能力者の戦いは凄まじかったのか、その子は足をやられ、シャツターごとにかで貫かれたような跡まであった。

やはり超能力を悪用するやつらはいるらしい。専任の治安維持機構が必要ではないか？是非妹達による治安維持を検討して欲しいところだ。1年後の就職先には調度いい。2万人の数は伊達じゃない！

そんなことを考えながらスーパーに向かっていた。ああ、早く行かなきや。しかしやっぱり外はいい。研究所は広いが外の景色が見られないからな。

！あれなんか今妙な感覚が体を突き抜けた。あれはなんだ？

「待ちなさい！」

不意に背後から声をかけられる。

「あんた…、何者？」

振り返れば、今学園都市で一番会つてはいけない人がそこにいた。

第十四話

振り返ればそこには今一番会ってはいけない人ここにいた。

御坂美琴 常盤台中学1年ながら7人しかいないレベル5の第三位で、超電磁砲の異名を持つ最強の電撃使い。そして俺や妹達の素となつたオリジナル。

「いやあ世間は狭いですね。つてどうすんのオ！ヤバいヤバいヤバい！！相手めっちゃ睨んでるし！！！」

「えーっとですね、あなたのお母さんのお姉さんのお姉さんのお姉妹の娘なんんですけど、カエツティイデスカ？」

「そんなこと信じられるわけないでしょ。それとも答えられない？なら痛い目にあってもいい？力ずくで聞いてもいいのよ」

こちらを威嚇するようにバチバチと彼女の身体から放電による火花が散つた。オリジナルはめっちゃ好戦的である。お嬢様ではない。お嬢様（笑）だ、これ。

逃げるのは無理そうだ。ここは覚悟を決めよう。

「わかった。とりあえず場所を変えよう。ただ先に用事を済ませてもいいか？」

「ええ、いいわよ」

「わかった。ついて来てくれ」

御坂美琴は憂鬱だった。とある悩みを抱えていた。事は1ヶ月以上前に遡る。それはとある噂が流れたからだ。

超電磁砲のDNAを素にしたクローンが製造されている という噂だ。軍事利用を目的としており実用化されてしまうだとう。最初は根も葉も無い噂だと思っていた。だがしかし完全に否定することできぬ。何故なら否定できないだけの理由もあつたから。

筋ジストロフィー症 筋萎縮と筋力低下が進行していく遺伝性筋疾患 現代医学では治療法がない。

脳の命令は電気信号で送られる。もし生体電気を操れば、通常の神経ルートを使わずに筋肉を動かせるのではないか つまり電撃使いのDNAマップを解析し、生体電気を操る術を植え付けることで筋ジストロフィー症を克服することができるのではないか。

そう考えた科学者は電撃使いである当時幼かった御坂美琴にDNAマップの提供を求めた。筋ジストロフィー症を目の当たりにした美琴はもちろん快く提供に応じた。 それが最善であると信じて。

その提供したDNAマップがクローンの製造に関わっているのではないかと懸念しているのである。

そしてその信憑性を高めるかのように、普段と異なった超電磁砲の目撃情報がちらほら流れで来るようになつた。

曰く、大量のレジ袋を抱えて歩く超電磁砲を見かけたとか。

曰く、スーパーで特番していた卵を見て「一人じゃないと安くならないのか……」と値札を睨んでいた超電磁砲を見かけたとか。

曰く、特売品を抱えて小躍りする超電磁砲を見かけたとか。

曰く、子供っぽい服を手に悩んでいる超電磁砲を見たとか。

最初それを聞いた時は思わずどこの主婦か？…と思つた。最も最後の噂は当人なのが。

ネットでは多額の研究費もらつてている割にケチ臭いとか、意外と苦学生なんぢやないかという本人説と、普段の本人から掛け離れた姿に以前から噂されているクローンぢやないかという説が流れていた。

直接真偽を確かめにくる者はいなかつたが、周囲の噂やネットの情報まとめるとあまりに具体的な目撃情報と自身に身に覚えが無い事なので、クローンの噂は信憑性が高いのではと思ったのだ。

それで目撃情報のあつた地域を散策していたのである。すると自分と同じような力の放射を感じた。気になり追いかけてみると、そこには自分とうつり一つの少女がいた。

クローンは実在したのだ！衝撃が全身を突き抜けた。襲い掛かつてくるのは、クローンに対する生理的な嫌悪。造りだした科学者達への憎悪。そして罪悪感。

複雑な感情が入り混じつたがすぐに切り替えた。もし軍事利用でクローンを造りだしているというなら、計画を頓挫させてやる。そう考えクローンの少女を問い合わせた。

少女は抵抗する気は無いのか、諦めたのか用事を済ませたら事情を話すようだ。

用事 それはスーパーでの買い物だつた。ああ、噂はここ今まで本当だつたんだ 先程までの緊張が一気に霧散した。

卵お一人様100円が2パック買った！着いてきたオリジナルのおかげだ。当の本人は、なんかさつきと違つて凄い脱力してるけど。今は近くの公園のベンチにいる。

「んじゃまあ、どこから話そつか、オリジナル」

「……オリジナルってことはやつぱりあんた、私のクローンなの？」

「ああ、検体番号〇〇号、一番最初に生まれたクローンで、ミサカ〇〇〇〇号と呼ばれている。ま、〇〇〇〇号って呼んでくれ」

「最初？ちょっと、まさかアンタみたいなのが五人も十人もいるんじゃないでしょうね？」

「ああ、今は俺を含めて五十一人だ。今後の計画で二万人に増える予定だ。みんなまとめて妹達って呼ばれている」

超能力者進化実験で新たに生み出された妹達はまだいない。生み出すには培養器で十四日かかるし、洗脳装置による強制入力もある。最も洗脳装置にかかる時間は今までのようすに都度調整する必要がないので数時間で済むそなうだが。

やつぱり、気味が悪いんだろうな。オリジナルの顔が青ざめている。憑依前なら自分でもそうなるかもしない。

「…………何のために造られたわけ？」

「元は量産能力者計画というクローンを軍事利用するために生み出された」

「…………どこのどいつが計画を主導してるので？」

「現場を仕切つてるのは天井だと思うけど、どうだろうなあ？学園

都市の上層部も関わってるみたいだし。それにその計画自体は失敗で凍結しちゃったし

「な……ー?え……?」

「生み出された妹達や俺はレベル5に進化できなってことがわかつて、量産型能力者計画は取りやめたんだ」

「じゃあアンタはなんでここにいるの?それにそつきの話と矛盾するじゃない」

超能力者進化実験のことを話す。妹達一万人の経験の蓄積とネットワークで経験の共有によつて、寿命のせいでレベル5になれない俺をレベル5に進化させる方法を。

「まあそんなわけで一万人を生み出す」とになつたんだ

「……」

「……オリジナルからすれば、俺達の存在は受け入れられないのかもしない。こんなバカげた計画を止めたいかもしない」
けれど。

「生まれてきた俺達は実験がないと廃棄処分になるかもしない。けど少なくとも俺がレベル5になるまではこの実験内容なら処分されることはないだろ?」

だから。

「その間に妹達に感情を芽生えさせて、実験してる奴らに妹達を人

間として認識してもいい。そうすれば簡単に殺さうとは思わなくな
るはずだ」

オリジナルの田を見る。

「だから俺達に生きるチャンスをくれないか？頼む」

そう言って俺は深く頭を下げた。

第十四話（後書き）

00000号が量産型能力者計画で買い出ししている姿を見られたために、クローンの噂がかなり早い時点で出回っています。

顔を上げられない。オリジナルはどう思ったか不安だ。勢いで言つたけど、失敗したか？心臓がバクバクいつてる。

「…………とりあえず頭あげなさい」

顔を上げ、オリジナルを見る。腕を組んで険しい顔をしているな。

「アンタの言い分はわかったわ。けど具体的にはなにをするつもり？」

「うう……」

感情が芽生える方法か。基本的には見守ることしかしなかった。色々な経験を経て成長するのだから、いつかは時間が解決してくれるかもしれない。だが、限られた時間がある以上何らかのきっかけは考えなければならないだろう。少なくともオリジナルは納得しまい。

実の所全く考えがないわけではない。一つは自身の感情をミサカネットワークで共有できないかというものだった。しかし感情データがどういものなのか、わからない限り共有することが不可能だ。

もう一つは洗脳装置を使った感情の入力である。一人にでも感情が入力できれば、あとはネットワークで共有できるかもしれない。し

かしこれは感情はどういったデータかわからない問題に加え、洗脳装置を使うには専用家が必要だ。

洗脳装置の専門家 一人だけ心当たりがあるが。

「本来、感情は自発的に芽生えないといけないと思つ。けどきつかになるものなら、一つだけ思い当たる方法がある」

「その方法は？」

「妹達は肉体や人格を速成させるために色々な技術を使つてゐる。その中で知識や人格なんかは洗脳装置つて呼べる機械で脳情報を入力して調整しているんだ。だから、それを使って擬似的な感情を入れすれば、本来の感情の芽生えを誘発できるかもしね。最も感情を入力できるのかどうかはわからないけど。けれど洗脳装置を監修した人なら可能かもしれない」

それでも、それでも砥信さんならやつてくれる……！

「布束砥信。彼女を見つけて出す」

しかし砥信さんを探すとなると大変だな。どうしよう。

「そう、わかつたわ。じゃあ私がその人は探すわ」

「外出してる時間に限りがあるし、それは助かるが、いいのか？」

「ええ、元はと言えば私のDNAが原因だしね。勝手に使われているのはしゃくだし、自分で撒いた種だもの。自分の手で片を付けるわ」

まさか協力してくれるとほ。

「オリジナル……お前結構いい奴なんだな……」

「なつ、ちつ違うわよ！ただでさえ、勝手にクローン造られたから研究を止めたいだけよ……つ、アンタその温かい目はやめなさい！――！」

照れだらうか、電撃を放出するオリジナル。オリジナルの優しさはビロビリだ。

「なんかアンタといふと、たまに疲れるわ……。といふか、アンタ本当にクローンなの？話を聞く限りだとクローンは感情ないんでしょ」

「とある人格が憑依して感情が宿つたんだ」

「……笑えない冗談ね。ビロの漫画の設定よ」

「ですよね。まあ普通は信じられないよな。

まあ原因はよくわからないんだわ。他の妹達と違つてレベル5に

進化できるみたいだし、まあ氣にするなオリジナル」

「他の妹達がアンタと同じでなくてよかつたわ。あとオリジナルって呼ぶのはやめなさい、御坂美琴って名前があるんだから」

んー気になるか。じゃあ。

「じゃあお姉様で」

憑依前からすればずっと年下の子だけど

「はあ？」

「いや他の妹達はお姉様つて、呼んでるんだ。見た目でみて姉妹に見えるしいいんじやないか、お姉様」

「…………はあ、まあいいわ

納得はいつてないようだが、諦めたようだな。

「時間も危ないし、そろそろ帰るわ。定期的にこの辺に買い物にくるから、もし布束さんを見つけたら教えてくれ、じゃまたなーお姉様！」

そうこうして遠ざかっていくクローンの少女を美琴は見送った。

クローンとは思えないような表情豊かな少女。

彼女は、ただクローンとして造り出された自分達の生を欲した。純粹な生の渴望。普通の人より、より人間らしいと感じた。

クローン製造の計画は止めた。だが彼女の生きるチャンスは潰しきたくはない。

少女の言つてゐることに嘘は感じなかつた。しかし、研究自体には疑問があつた。

量産に失敗したクローンをレベル5に進化させて何に利用するのか？

たしかにレベル5は貴重だ。しかし、自分のクローンが同じ能力なら、自分は様々な研究に協力しているので、十分なデータがあるはずである。新たな研究を興すような話は聞いていない。軍事利用は凍結したから違うだろう。

本来研究は何らかの目的があつて行われるはずだ。それが不明瞭なのである。

それが何かはわからない。理解するには情報が少な過ぎる。

彼女から聞いた情報 量産型能力者計画、科学者・天井、妹達、超能力者進化実験、そして布束砥信。これらがキーワードだ。

幸い発電能力者である自分はネットワークから様々な情報をハッキングして入手できる。まずは情報収集が必要だ。

絶対に妹達を命を奪わせない。

超電磁砲が今学園都市の闇に立ち向かう

。

第十六話

なんか主人公が途中で変わったような気がする000000号です。

現在、正座中です。周囲には妹達がいます。

「買い物でお姉様に遭遇するとは迂闊です、とミサカは00000号を叱責します」

えーと、なんでバレてるんでしょうか？

「ミサカネットワークからお姉様と遭遇したことはリアルタイムで情報を得ています、とミサカはネタバレします」

……まさかストーキングされます？

「しかしお姉様に知られた所で実験の障害にはならないのではないでしょ？、とミサカは疑問を提起します」

話を逸らされた気もするけど、確かに協力してくれる話になつたからな。本来ならなじられても、実験を止められても文句は言えない。初対面でしかもクローンが一方的にお願ひしたけど、文句一つ言わなかつたし。お姉様はいい人だよな。

「確かに実験を止めるとなると一個人でできる事は高が知れています。妨害されたとしても、前の計画のように計画の前提が破綻でもしない限り、実験は継続するため障害にはならないでしょう、とミサカは判断します」

破綻ねえ。この実験だと俺がいなくなっちゃ えば止まりそうだけど、その時点で妹達に死亡フラグが立ちそつだからな。それは一番出来ない。むしろ時間稼ぎはしたいんだが。

「所で〇〇〇〇〇〇号。お姉様との会話の中で、私達に感情を芽生えさせる話をしていましたが本氣ですか、トミサカは問います」

会話もバツチリ盗聴されているんですね。

「本氣だぞ。前も言つたけど、俺達は人と大差無いはずだ。だからきつと感情だつてある。クローンだからつて自分を卑下しなくてもいいんだ。人扱いされないで廃棄処分されていいなんてことはない」

「妹達は計画の為に造られた模造品です。作り物の体に借り物の心。人扱いされないのも計画が無ければ廃棄されるのも当然です」

「体はそうかもしれないが心はそつなんかじやないさ、お前達は」

「俺は今まで過[ハ]して知つてている。皆同じ姿だが、表に感情を出せないがそれ違う個があることを。」

「外の事が気になつて仕方ない1号、甘いもの好き2号、一番手伝つてくれる3号、綺麗好き4号、みんなに虜められると助けてくれる5号」……他の妹達はあつてないからわからないけれど、けど全く同じ妹達はないはずだ。だからお前達がいなくなつたら、お前達の代わりはいない。いなくなつたら俺が悲しいぞ」

「悲しい ですか」

「どうして〇〇〇〇〇〇号はそこまで私達を気にするのですか」

昔の自分を見てるようで助けたいってのもあるけど、これは言いつ
らいな。

「まあ、俺はお前達のお姉ちゃんだからな。妹達を気にして当然だ」

「…………」

あれー返事ないんですけど。ひょっとして外したかな?

ミサカ1号は考える。00000号の事を。思えば初めて会つたと
きから、何処か変わつた個体だった。

妹達は感情がない。その筈なのに、他の人間と遜色ないイレギュラ
ーな00000号。ネットワークや洗脳装置で知つていなければ、
人間だと認識したはずだ。

感情の入力や調整をされたわけでもなく、持つて生まれた感情で動
く00000号は妹達の間でも興味が尽きない。布束という科学者
は特に興味を持ち影響を受けたのではないか。

彼女は00000号と比べると、余り表情を変えないからむしろ妹
達に近い印象だ。だが00000号と一緒に距離を置いていた時は、
やや落ち込んでいるように見えた。

そして自分達も少しずつではあるが00000号に影響を受け始め

ている。

一番は食だろうか。食への興味はあったが、さほど重要なことではなかった。00000号の手料理は決して知識にある一流の調理法で作られたものではない。だが美味しい。妹達の間で料理の情報のやり取りが行われるくらいだ。もしかすると他の妹達は羨んでいるのかもしれない。そういう点では自分達は恵まれているだろ。

00000号は自分達を、そして周りの環境を変えようとしている。クローンと人間の違いはないと訴え、感情を芽生えさせて人とは違わないと証明させたがっている。人として生きる為に。

だが自分達はクローンだ。感情があつたところでそれは変わるとは思えないし、いつかは処分されるだろう。例え処分されようと代わりのきくものだ。

しかし。

00000号が処分されたら。彼女と同じ個体は生まれるだらうか？

どうして感情を持った妹達ができたのかわからない以上、それは不可能だ。そう考えると理解不能なノイズが走る。それがどうしてなのかよくわからない。

「…………あのそろそろ勘弁してもらひてもいいでしょうか？足が痺れて痛いんですけど」

未だに正座をしている自称姉は若干涙目だ。

「…………不出来な姉を持つと妹は大変です、とミサカは嘆息します」

00000号 本当に不思議な個体だ。

第十七話

お姉様と会つた事はどうやら黙つてくれるらしい。聞かれたら答えるが聞かれなかつたら答えないというスタンスだ。まあ口頭で注意された訳でもないしな。怒られ損な氣もするが確かに結果オーライとは言え注意不足だ。深く反省せねば。

そんなこんなで一ヶ月過ぎた。もうすぐクリスマスと年越しらしい。お姉様には残念ながら会えないでいる。実験のスケジュールが優先だから外出時間がどうしてもバラつくからかもしれない。砥信さんは会えたんだろうか？

妹達は順調に数を増やしている。この研究所でも既に100人を越えた。全体でみると月に約2000人くらいのペースだ。人口受精卵から促成したとしても一週間かかるので、妹達の増員にも限界はある。しかしこのペースだと二万人揃えるだけで、十ヶ月はかかるはずだが間に合うのか？実験は一年だったはず。だが天井が言うにはスケジュール通りらしい。

妙な違和感は感じつつも、日々は過ぎていく。そして何の予兆も無く事件が起きた。

サイバーテロによる複数の研究所の破壊工作。それは妹達や実験に関わる研究所のみ起きた。

突然機器が壊れたり、火災が発生し炎上したものの、不幸中の幸い
か研究員や妹達に被害は無い。しかし機器やデータは全壊、二十あ
る施設が十六基も壊されてしまつたため、全壊してしまつた機器の
代わりを揃えること、他の研究所への移送作業で実験が若干遅延す
るようだ。

関連施設からの襲撃から見て犯人は明らかにこの実験を狙つて
いる。その為残りの研究所は電気的な外部の通信を一切遮断した。

犯人は今のところ捕まるどころかわかつてもいない。ただ学園都市
には様々な研究グループが存在し、似たような研究を行つて
いると妨害工作してくることもあるそうだ。なのでその一部の犯行かもし
れない。正々堂々と研究で勝負すればいいのにとは思うが、限られ
た予算や期限によつては強行手段を取つてもおかしくはないそうだ。
にしてもクローンを使った似たような実験は他にもあるのかと辟易
した。

こちらとしてはスケジュールの遅延は内心ありがたい限りではある
が、スケジュールの唐突な変更は研究者達を困らせている。他の研
究所では妹達の手も借りてるぐらいだ。

残る研究所は四基。サイバー テロは出来ないから、もしかすると直
接襲撃されるかもしない　　なんてな。なんだかんだでここは
セキュリティが高い。訓練でここにセキュリティのハッキングをや
ろうとしたけど複雑過ぎて電子ロックの扉を開けるのに精一杯だつ
た。レベル4でこれなら、例え能力者でもそう簡単に内部には侵入
されないだろう。それに研究の遅延目的なら充分成功してるしな。
襲撃なんて起こらないだろ。

そう思つてた自分が馬鹿でした！この世界が俺に優しくない世界だって、死亡フラグ満載の世界だって忘れてた！

モクモクと充満する煙、時折爆発音が聞こえて来る。どうやら襲撃されたようです、本当にありがとうございました。

サイバーテロではたまたま被害がなかつたが、いつこちらに被害が来るかわからない。百人を超える妹達とともに消火作業にあたる。施設自体にも消火装置があるはずなのだが、電子機器が異常を起こして動作してないからだ。

こういう時、ミサカネットワークは便利だ。ネットワークを駆使して研究所内の見取り図を共有、被害が出ている場所に妹達を迅速かつ効率よく割り振る。増員が必要ならばすぐに連絡が来るし、作業が終われば次の仕事の割り振りも即時行われる。レスキュー・ミサカでもやっていけるかもしれないな。

消火作業に当たつていると、もの凄い音が響いてきた。あれは何処かで聞き覚えがある…………あれは雷撃の槍の音だ！もしかすると侵入者かもしれない。となると侵入者は発電能力者か！サイバーテロも能力者の犯行が疑われていた。同一犯の可能性が高い。

息を殺して音のするほうを見遣る。一室から出てきた奴は深々と帽子を被つていて誰かはわからないが、体格からして俺達に近いから少女だろう。

俺達のような少女の発電能力者　　?まさか、そんな。

不意に以前とある時に感じた違和感が襲つた。間違いない。あの人は彼女だ。

少女は事を終えたようで直ぐさまその場を跡にした。しかし俺はその場を動くことは出来なかつた。

一体どうこうつもりなんだ……お姉様!?

第十八話

襲撃を受けたのはここだけでは無かつたらしい。他の施設も同様に襲撃を受けた。残る研究所は一基。

俺といつもの五人を含む二十名の妹達はそのひとつ研究所にいる。襲撃を受ける可能性があり、緊急に移送しなければならなくなつたのでその手伝いのためである。他の妹達も二十名ほど残りの研究所から実験を引き継ぐ新たな外部研究所への移送作業を行つてゐる。

犯行手口はほぼ同じ。施設に直接侵入して機材及びデータの破壊活動を行つた。死傷者はなし。セキュリティは悉く反応せず、警備員や研究者は警報を誤作動させて遠ざけていたので目撃者なし、監視カメラも襲撃者を捕らえる事ができなかつた。このままで実験の中止も有り得る状況だ。

唯一の目撃者である俺はその事を黙つてゐる。やはり何故という疑問が尽きないからだ。

あの時お姉様は間違いなく実験は潰さないと約束してくれた。しかし今の状況はどちらかと言えば、実験を潰しにかかつてゐる。これはどういうことだ？

あの場では演技だったのだろうか？　いやそれならば妨害自体もつと早く行われてもおかしくはない。一ヶ月も待つ必要性はない筈だ。それ以上に演技のような気がしない。

となると、一ヶ月の間に心変わりするような事があつたのか？

お姉様は砥信さんの探索を引き受けてくれた。もしかして砥信さんと会つて何かを知つたのか？知つたから実験を妨害しにきた？やや飛躍しているし根拠もないが、それが一番しつくり来る。

だがその場合なにを知つたんだ？実験を潰すとなるとよほどの事だ。だがレベル5に進化させるだけの実験じゃ、潰す程の理由にならない。もしかして俺の知らない何かがあるのか？

くそ、わからん。妹達と相談したいけど、実験を妨害しそうな理由に関しては対立グループが研究の妨害をしているんじゃないかとう話でまとまつてたし、あまり詳しく話すとお姉様が襲撃犯とバレる可能性が高い。

あの時お姉様に聞ければよかつたが、さすがに呼び止められなかつたし。ああ、こんな時砥信さんがいればなあ。

研究所は慌ただしい状況だ。一晩で施設内の全研究データの移送をするのだから妹達の手も借りたいというわけだ。にしても膨大な資料の山だな。ジェンニが欲しいね。

妹達を4人のグループに分け、それぞれが研究員の指示を受けながら膨大な研究データを搬送していく。一体何往復するんだろうか、これ？段ボールの箱の山を見ると妹達全員連れて来たくなるわ。

しばらく段ボール達に悪戦苦闘し、一段落した所で新たな指示を貰うため、研究員を捜す。みんな忙しそうで声かけづらいな。

研究室を一望できる階上のガラス張りの所にいる中年の研究員と若い女性が視界に入った。！？あれは砥信さん…？なんでこんな所に？実験には参加していなかつたはずだ。もしかして参加することになつたんだろうか？

とにかく聞きたいことが沢山ある。会いに行かなきゃ！作業を放置して砥信さんのところへ向かう。

砥信さんはない部屋から出てきた所だった。

「砥信さん…」

誰かに咎められたようにピクッと体を震わせ振り返る彼女
違ひない、砥信さんだ。

「あなたは〇〇〇〇〇号？ビビって此処に？」

間

「移送の手伝いでここに来たんだけど、砥信さんを見かけたから、つい作業すっぽかしてきたんだ。久しぶり砥信さん」

「そつ…………however、これは好都合かもしない
好都合？どういう事だ。」

「いい、ここから逃げ出しなさい。出来れば妹達を何人か連れて」「逃げろって……もしかしてお姉様が研究所を襲撃している」と関係があるのか？」

「わづ、そこまで知っているのね」

やはりお姉様と砥信さんは会っているようだ。襲撃も知っているとなると共犯なのか？一体どうして？

「あなたは何も知らされていないようだけど、あなたが受けている実験はとある実験の副産物に過ぎないわ」

レベル5に進化する実験が副産物？どういう事だ？レベル5は能力者で最高位のはずだ。それが副産物だなんて。

「その計画は絶対能力進化（レベル6シフト）実験^{アケセラレータ}。学園都市最強のレベル5である一方通行を絶対能力者（レベル6）に進化させる計画よ」

え？最高はレベル5じゃなかつたのか？疑問を口にする前に、砥信さんは続きを言った。

「その計画は進化させるために一方通行に20000通りの環境で妹達を20000人殺害させるわ

は、い？

「あなたが関わっている実験はその計画が前提になっている。な

me1 y、20000人の妹達を犠牲にして、レベル6とレベル5の能力者を生み出すつもりよ」

……なんだよ、それ。

第十九話（前書き）

一部修正しました。展開に変更はありません。

第十九話

世界はいつだって、こんな筈じやない事ばっかりだ とあるアーネの台詞だ。現実は理不尽だ。誰しもがその現実の中で生きなければならない。思い通りにいくなんて殆どない。なるほど確かにその通りだ。

軍事利用で生み出されて、失敗したと分かれば欠陥品と蔑まれ、今度は実験動物として捨てられたら、たった一人のための生け贋だと。

ふざけるな！ そんなふざけた理由で妹達は二万人も虐殺されるのか！ 計画した奴らは氣が狂ってる！

「詳しい説明がしたいけど時間が無いわ。 anyway、妹達と逃げなさい。その分計画が遅延するはずよ」

「わかった。砥信さんはどうするんだ？」

砥信さんがこんな狂氣の実験をするとは思えない。なんなら一緒に逃げるべきだ。

「…………私は残るわ」

「どうして…？」

「私にはやる事がある。私にしかできない事が。だからあなたはあなたのですべき事をやりなさい」

彼女は覚悟を決めた顔だ。止める術はない。

「…………わかった。砥信さん…………必ずまた会おうー」

「ええ、また必ず」

振り返らずに妹達の元へ急ぐ。なんとか一緒に逃げるようになつて説得しないと……。

最後に〇〇〇〇〇〇円に会えてよかつた 布束砥信は思つ。

彼女がこの研究所にいるのは、とある研究グループから絶対能力進化実験に参加要請を請けたからだ。

急に呼ばれた理由の予想はつく。先方は妹達の調整実績から大掛かりな移送作業で不備が起きないか確認してほしいということで打診したそうだが、大方研究所を襲撃された時に責任をなすりつける気だろう。

これは御坂美琴と連携して行つたわけではないが、結果的にこの施設に潜り込むための布石となってくれた。しかも移送作業を優先し、外部への警戒が強くなっているため内部のセキュリティが甘くなつ

ている。

計画の内容を知り、計画を内部から妨害する為に準備をしてきた彼女に取つては、絶好の機会である。

御坂美琴は直接施設を襲撃し、計画を頓挫させようと動いている。だがそれでは例え完遂したとしても計画が中止する可能性は低い。

それだけ絶対能力者という存在は大きいのだ。誰もが到達したことがないレベル6は。

過去に幾人の研究者がレベル6への到達を目指したが、悉く失敗に終わった。なかには実験するまでもなく樹形図の設計者の予測演算によつて絶望的だと導き出されたものもある。

だが今回は樹形図の設計者の予測演算が成功をはじきだしたのだ。今まで誰もなし得なかつた栄光。研究者ならば誰もが夢見るだろつ。

そのため何としても計画を存続させようとするはずだ。利権さえ考えなければ外部の研究機関に研究の引き継ぎを行うだけだ。事実、彼女の予想通りに研究の移送を行つてゐる。

となるとそれ以外の方法で計画を妨害するしかない。利で計画を覆す事はできないのだから。調整中の妹達がいる部屋へ向かう。妹達の移送は最後のはずだ。洗脳装置に妹達がいる。まだ調整中の状態だ。慣れた手つきでコンソールを操作する。そして白衣のポケットから取り出した記憶媒体を端末に差し込んだ。

これは量産型能力者計画の頃から妹達の為に集めていた感情データを改修したものだ。本来これを使うつもりはなかつた。これはあくまでプログラムに過ぎないし、いつか自然な形で妹達の眞の感情が芽生えて欲しいと考えていたからである。それでも集めていたのは最後の手段として、妹達の感情の発露に役立つのではと考えたからだ。

しかし今はそういうもいつていられない。とある感情に特化したデータを調整中の妹達に強制入力する。その感情とは『恐怖』。

研究者達は妹達を実験動物としてしか見ていない。だからこそ一万殺すことになつても、何の感慨もないのだ。

だが、もし妹達に恐怖のプログラムを入力したら。

死を当然のこととして受容する妹達の中からその運命を嘆く者が現れるかもしれない。その姿に実験動物以上のものを感じ取る研究者が現れるかもしれない。そんな彼女達の声が誰かの心を動かし、計画を中止させるかもしれない。

利ではなく情。研究の関係者の良心に訴え計画を中止させるのが彼女の妨害方法。

もちろんすぐに効果があるかと言わればNOだ。可能性も高くはない。妹達も何人か犠牲になるかもしれない。だがその可能性に賭けた。自分と00000号のような関係が誰かしら築けると信じて。

ガンツ

!

いきなり後頭部を押さえ付けられ、コンソールに叩きつけられる。

「関係者である可能性を考慮して上に確認をとりましたが」

顔はコンソールに押さえ付けられたまま、腕をねじられ即座に拘束された。

「データ類の移送が完了するまではここへの立ち入りは超禁止とのことでした」

「ぐ……あ……」

拘束した少女はねじる力が増した。布束砥信は思わず声を上げる。

「襲撃者は単独犯であると推測されているが一方の襲撃が超陽動である可能性を捨てるべきではない。どうやら麦野の読みは超当たつていたようですね」

布束を拘束する少女の名は絹旗最愛。今回の襲撃事件で施設防衛の依頼を請けた学園都市の暗部「アイテム」の構成員である。

「このまま依頼人に引き渡します。抵抗しても超無駄です」

背後による柄の悪い一人の男が近づく。

（無駄な抵抗？確かにそうかもしね）

布束は思う。問題は計画だけではない。仮に計画が頓挫しても、クローンが普通に生活できるだろうか？さらに過酷な運命になるだけではないか？迷いがないわけではない。

だがしかし、計画の全貌を知り一人で立ち向かうと覚悟し、全てを背負い込んだ少女がいた。こんな自分を信じて動いた少女がいた。

だから止まるつもりはない
！あの子達に運命を切り拓くチャンスを！

「…………！」

絹旗は異変に気付き布束を投げ飛ばして、コンソールを叩き壊す。だが一足遅かつた。

端末の画面には、「インストールが完了しました。ミサカネットワークに接続しています」と表示されていた。布束は絹旗に見えないよう片手でコンソールを操作し、入力を完了していたのである。

ニヤリと笑う布束。これで入力した感情プログラムは全ての妹達に共有される。誰にも止められない！

はずだった。

端末から警告音が流れ、接続がネットワーク側から中止された旨のメッセージと「上位個体20001号のものでないコード」という

警告メッセージが表示されたのである。どうやら上位個体を介さないとネットワークを使うことができないらしい。だがしかし、上位個体など存在しなかつたはずだ。

（何だこれは！？ いつの間にこんなセキュリティが……………）

「よく分かりませんが、あなたの口論見は超失敗したようですね」

絹旗の言葉に布束の顔は絶望に染まった。

第十九話（後書き）

この時点でのアイテムいたの？といわれると疑問ですが参戦させました。

上位個体に關しても悩みましたが、個体が存在しなくてセキュリティ自体は設定できると思ったので、そのままです。

第一十話

急いで妹達のいる場所に戻ってきた。まだみんな慌ただしく作業している。幸い研究者達は気が付いていないようだ。

「どこに行っていたのですか〇〇〇〇〇〇号、とミサカは問い合わせします」

「いなくなつていた間のフォローは大変でした、とミサカは愚痴ります」

と一緒に作業してた妹達。それはどうも「めんなさい」じゃなくて。

騒ぎを聞き付けられると困るから、ミサカネットワーク越しに話しかける。

（大変なんだよ、このままここにいるとお前達が死んじゃうんだ！
絶対能力者進化実験とかいうやつで）

殺されてしまうんだ。だから早く逃げないと
と続ける前に妹達の一人が答えた。

（どこでそれを知ったのですか？〇〇〇〇〇〇号は関係者ではないから通達されていなかつたはずです、とミサカは問います）

それはつまり。

（お前達知っていたのか？！）

なんで黙っていたんだ、このままだと間違いなく死ぬんだぞ！？

（関係者以外には機密事項だつたからです。00000号はこの計画の関係者ではありません、ミサカは答えます）

そういうことか。俺はあくまで超能力者進化の関係者ではあるが、絶対能力者進化実験に関わっているわけじゃない。例え後者の実験を行わないと成功しない密接な関係を持つ実験だとしても、あくまで別の実験という認識なのか。

（でもお前達を犠牲にしないとレベル5になれない計画なんだろう？だったら関係あるじゃないか！俺は妹を犠牲にしてまで進化なんかしたくない！）

能力を使うことは楽しいから、カリキュラムを受ける分は構わない。能力が進化するのも人並みに欲してるかもしね。けど、二万人を犠牲にした進化なんて絶対に耐えられない！

（ミサカは計画の為に造られた模造品です。実験動物に過ぎません。実験が無くなれば、ミサカは存在理由がありません、ミサカは答えます）

だから死を受け入れるのか？前から思つていたが、自身の命を粗末にしそうだ。こんな命を弄ぶような運命なんて受け入れちゃダメだ！

存在理由がそんな下らないことしかないなら、それだけじゃないってことにしてやる！

（だったら俺の為に生きてくれ…）

ありつけの気持ちを込めていった。

（……それほどひこう事でじょうか、ヒミツ力は問い合わせます）

（前にも言つたが、お前達がいなくなるのは辛い。この計画でお前達の命が奪われるって考えたら胸が張り裂けそうだ。そんな気持ちになんてなりたくないんだよ…）

眼が潤む。耐え切れそうにない。

（だからずつと傍にいてくれよー頼むからー…）

眼から涙が零れた。

なんて我が儘な言葉だらう。これはまるで馴々をこねる子供だ。と妹達は思つた。

自分達は代わりがきく、命の価値は無いものだ。そう信じている。今まで〇〇〇〇〇〇号は自分が処分されることを怖がり、自分達が処分されたら悲しいと言つた。事実今彼女は泣いている。疑つたわけではないが、泣くという行為を初めて目の当たりにしたため衝撃が走つた。

彼女は何故泣いているのか。自分達が殺されることを知つたからだ。

何の価値も無い自分達を失つてしまつ それだけで哀しむ人がいるのだ。

そう考えると、死ぬことができなくなつた。こんな自分達を失つて哀しむ人を助けることができる。それはとても素晴らしい事ではなかと思えた。

それにこのシチュエーションに該当する状況は、洗脳装置の情報によればまるで 愛の告白ではないか?ずっと自分の傍にいてほしいなんて、皆田の常套句である。

そう思うと不思議と胸が暖かくなる。初めての感覚に少し戸惑いを覚えたが、身体に不具合はない。

(これがなんなのかはわかりかねますが 、何故だか、その言葉はとても響きました、とミサカは率直な感想を述べます)

シリアスな状況なのに何故だか大きな誤解が生まれた。

「分かりました。どうすればいいですか、とミサカはお姉様に問います」

お姉様 ?まあ姉と自称しているからそうだけど。まあいい。それよりも理解してくれたようだ!

「ともかくみんなで逃げよ!ついー!」

一斉にいなくなるとバレるかもしない。さつきの作業グループごとに段ボールを運ぶ振りをして脱出するよつこした。

総勢二十名の大脱走だ。どうしても時間がかかる。殿は俺のグループだ。他の妹達より能力の高い俺ならば、なにかあつた時、多少強引気味にでも切り抜けられやすい。

幸いなことに先行している妹達の情報によると、外への通路までは誰も気づかなかつたようだ。手際が恐ろしい程いい。よく考えると自分達は軍事利用されようとしていたから、潜入工作なんのも洗脳装置で知識を得ているんだ。脱出時の隠密行動も一般人のそれより能力が高い。

電子ロックは能力で解除していく。他の高度なセキュリティはお手上げだが（警備ロボットなど。操ることは難しいので壊すぐらいしかできない。その時点でバレる）移送で内部のセキュリティが甘くなっている。ならばこの程度ならなんとかなる。よしこのまま脱出できる！

そう気が抜けた瞬間だつた。

「おー、そこでなにをしてるー！」

しまつた、見つかったか！即座に雷撃の槍で迎撃しようと行動する。ここまできたら強引に行くしかない！

振り返りつつ、声をかけた若いチンピラみたいな男（何故研究所にいるんだ？と思った）に向けて雷撃の槍を放つ。幸い一人だ。男の手には拳銃？！

一発の銃声が研究所内に響いた。

第一十一話

絶対能力者進化実験。

量産異能者「妹達」の運用における超能力者「一方通行」の絶対能力への進化法。

樹形図の設計者によると、学園都市最強の超能力者である「一方通行」のみが絶対能力という深淵に到達できる。ただし通常のカリキュラムを250年組み込む事でだが。

250年人体を活動させる「二五 年法」も検討されたが保留とし、他の方法がないか検討された。その結果、樹形図の設計者が実戦における能力の使用が成長を促す事を導き出したのだ。であるならば、特定の戦場を用意し、シナリオ通りに戦闘を進める事で「実戦における成長」の方向性をこちらで操ることはできないだろうかと考えた。

樹形図の設計者の演算の結果、一二八種類の戦場を用意し、超電磁砲を一二八回殺害することで絶対能力者に進化できることが判明する。

しかし当然超電磁砲を一二八人も用意できない。そこで妹達に着目した。妹達を超電磁砲の代わりに使い同様の結果が得られないか、と。

妹達は超電磁砲より性能が劣る。二万通りの戦場を用意し、二万人の妹達を用意する。圧倒的な数で同等の結果を得ることができた。

二万種の戦闘と戦闘シナリオも演算された。時間、使用される武装にいたるまで全て。

九八 二通りの屋内実験、一 一九八通りの屋外実験は全て演算により算出された緻密な実験なのである。

だからこそ想定外の事象が発生してしまった場合は脆い。

妹達脱走

それはその想定外の事象に十分該当した。

本来は絶対有り得ない状況に研究所は騒然となつた。基本的に妹達は従順で計画から逃げ出すとは考えられなかつたからである。しかも二十人も。

最後に妹達を見かけたであろう男 アイテムの下部組織の男は妹達に発砲したあと、彼女が発した電撃で気を失つたらしい。馬鹿が 殺してしまつたらまた造り直さねばならなくなるじゃないか！研究者たちは暗部はやはり暗部でしかないと溜息をついた。

しかし研究所に残つた妹達のミサカネットワークから脱走した者の居場所は特定できる。

ならば早急に居場所を特定し探索部隊で取り押さえなくてはならぬ

い。実験の開始日が差し迫っているのだから。

だがしかし。逃げ出した妹達は足跡を追つことはできなかつた。

ミサカネットワークから彼女の存在が確認できなくなつたからである。

では彼女達はどうなつたのか。研究所からの逃走時に話は遡る。

男の拳銃に気がつくのが遅かつた！銃口は明らかに俺に向いている。
間に合わない！

銃声が鳴り響く。

「…………つー」

思わず皿をつむる。 痛みがこない。まさか外したのか？

そうではなかつた。目を開けば原因は歴然だつた。男と俺の間の空
間は遮られた。傍にいた3号が身を呈して。俺を護つてくれたのだ。

「3号ー。」

「だ、大丈夫です、とミサカは答えます」

意識は大丈夫のようだ。どうやら腕をやられたらしく。腕から血が

溢れている。男は電撃を食らい氣絶したようだ。

ブレザーを脱ぎ、シャツの袖を破いて腕を縛る。今はこの程度の応急処置しかできない。とにかく安全な場所まで逃げないと…。

研究所を抜け出して一時間半。今は地下の下水道を歩いている。逃走時追っ手が懸念された。居場所がバレればすぐに捕まるだろ。妹達の居場所がわかるミサカネットワークと人工衛星による監視、これらの追跡をかわさなくてはならない。

ミサカネットワークは電波だ。だから電波の脆弱性も当然引き継いでいる。妹達の中継があつたり、比較的浅い階層の地下なら問題ないが、入り組んだ深い階層の地下であれば電波が届かない。

当然人工衛星も地下深くまでは監視できないだろう。

以前お姉様との会話をネットワーク越しに盗聴された時に、盗聴されないようにするにはどうしたらいいかなんて考えてた事がこんな所で役に立つなんて不思議なものだ。

けれど、3号の体調がまずい。こんな不衛生なところにいたら怪我が悪化してしまつ。出血が多いのだろう、顔色が悪い。

限界だな。

これ以上ここにいるのは得策ではない。とにかく治療を優先すべき

だ。となると、ドラッグストアか病院あたりに忍び込むか。

「3号、大丈夫か？今から治療しに外に行くからな」

「くりと3号が頷き、意識を失つて倒れた。やはりかなり我慢していたらしい。少し頭を撫でた後、彼女を背負い、他の妹達と共に地上に出た。

近場にあつたかなり広い病院に忍び込む。できればドラッグストアのほうがよかつたが、周辺にはなさそうだ。セキュリティは研究所ほど厳しくない。

侵入するのに抵抗がないわけではない。申し訳ない気持ちになりながらも一室のベッドの上に3号を寝かせ、包帯や薬を探しに行こうとしたけど、他の妹達が代わりに探しに行つてくれた。

一人きりになつて少し落ち着くと、色々考えてしまう。これからどうすればいいのか。

このまま逃げ続けるにしても、一十人も隠れる場所はそうそう見つからないだろう。しかも現金も身分証もないの、日々の生活もままならない。なんとかしないといけないが方法が思い付かない。妹達とも相談するべきか。

それに砥信さんやお姉様、他の妹達も気になる。特に研究所を襲撃しているお姉様や残つた砥信さんはどうしているのだろう。無事な

らばよいが。

計画を頓挫させるとなると一人の協力してもらつたほうがいいかも
しない。俺が知らない計画の詳細も知つていいだろうし。砥信さ
んの住所はわからないが、お姉様なら学校経由でわかるかもしけな
い。まずはお姉様を探そう。

考えがまとまつた時に、人の気配がした。妹達か？

「おや、泥棒かと思つたが怪我人かい？」

白衣の男！？見回りか！

「近づくな！」

「でもね、僕は医者だから。彼女を診ないとね？かなり傷が深そう
だしね」

どうする？しばし睨みつける。応急処置しかできないから、診ても
らえるなら助かる。3号に無理はさせられない。何か事が起これば、
最悪他の妹達は逃がそうか。

「…………わかった。…………妹を助けてくれ、頼む

頭を下げる。

「患者の命を救うのが僕の仕事だからね。なんとかしてみるぞ」

それがカエル顔の白衣の男　　冥土歸し（ヘブンキャンセラー）
との出会いだった。

第一十一話（後書き）

携帯でゼロが「つま」へ変換できず、図形の丸で代用しています。

第一十一話

Q 銃弾を受けた腕の怪我及び多量の出血を伴つた体の治療にどの位の期限を要しますか？

A、全治一日です。

はい？

いやいやいや。「冗談はいいから！憑依前でもそんな大怪我したことないけど、流石にそんな短期間に無理だつて！…てめえ、俺の妹を冥土に送り帰す氣ですか！？」

そう思つていた時期がありました。学園都市の医療技術をナメていた。冥土帰しは、正しくヘブンキヤンセラーだつたのだと知つたのは、30分ほどで処置を終え3号の顔に血の気が戻つていく様を間近で見てたからである。

あとで聞いたが冥土帰しは学園都市でも有数の技術を持つ医者であり、どんな病気や怪我でも治すと呼ばれる名医なのである。

3号に施された治療は、肉体再生オートリバースという能力　　自身の肉体の損傷を回復する能力の原理を医術に組み込んだ治療法なんだそうだ。

学園都市ではこのように能力のメカニズムを解明し、様々な分野に

応用してこる。……俺達もこいつ利用のされ方なら納得できるんだろうが。

「さて、君達が何者なのか教えてくれるかい？流石に二十つ子って話ではないと思うんだがね？」

治療を終えた冥土帰しが問う。3号が無事治療されたので他の妹達も傍にいる。そりや同じ顔が二十人もいればおかしいか。

だがどうしたものか。全部話してもいいか悩む。内容は問題ありまくりの超秘密事項だ。いい人そつだけに閲わらせるべきかどうか。

「だいたいの事は予想はつくけどね。君達が困っているなら力になりたいんだ」

仕方ない。俺は知っていることを全て話した。

事情を話すと冥土帰しが眉をひそめた。そして俺達を匿うと提案までしてくれたのだ。自分達は発信機のようなものがあるので難しいのではと問うと、電波を防ぐような部屋があるらしい。

あまりの都合の良さに多少疑問が残るが、といつて他にあてもない。素直に甘えることにした。

御坂美琴は双眼鏡を手に、とある研究所を覗いていた。研究所はSプロセッサ社脳神経応用分析所という場所であり、表向きでは筋ジストロフィーの病理研究を行っていることになっているが、実態は絶対能力者進化という悍ましい計画を行っている。

その計画を知った彼女は計画を破綻させようと関連施設の襲撃を行つてきた。手始めにネットワークを介したサイバー テロから始まり、直接襲撃まで及んだ。

この研究所は関連施設の最後の一基で昨晩襲撃しそこねた施設である。昨日は残る関連施設を二基まで追い詰めたものの、襲撃した施設で警備していた暗部との交戦で消耗が激しかったため、昨日うちにまとめて襲撃できなかつたからである。

昨晩の襲撃を考えると能力は完全に知られていると考えていい。そのためより強固な警備を行つてゐるはずだ。だがそれでも止まるわけにはいかない。確実に潰すために偵察を行つてゐるのだが……。

おかしい。人の出入りがない。さらに電気機器すら稼動していない。罠か？しかし、罠だとしても侵入して確認せざるを得ない。

意を決して施設に侵入してみる。しかし予想に反して全く抵抗はなかつた。というより人が全くいない。機材も全てのデータが消去されていた。

もしかしてこれは撤退したのか？慌てて携帯端末で確認してみる。第七学区に本社を構えるSプロセッサ社が経営破綻し、筋ジストロフィーの病理研究をしていた施設が撤退したというニュースが流れ

ていた。

(せつた……………？せつた？！)

昨日の攻防戦で継続を諦めたのか、一基だけでは計画を維持できないのかは分からぬ。分からぬけど撤退まで追い込んだんだ。

ここまで来るのに彼女はかなり無理をしてきた。通常の授業に加え、夜は寮の管理人に見つからずに抜け出し、施設の襲撃を行つてきたのだ。妹達が殺される夢を見てうなされては、睡眠も口クに取れていない。そして昨日の攻防戦。肉体の消耗は激しかつた。それがやつと報われたのだ。

やらなければならぬことはまだ沢山ある。計画が終わつたあとの妹達の身柄をどうにかしなければいけない。けれど。

(妹達はもう死ななくてこれで)

確定していた死は遠退いたはずだ。ようやく訪れた平穏。

安堵して寮に戻る。足取りは軽い。

「お姉様」

唐突の声。まさか
達がここにいるー？

「計画はまだ終わっていないんだ。だから力を貸してほしい」

第一十一話（後書き）

感想を見て力エル医者の人気に驚きました。

次回は計画破綻作戦会議です。破綻させるにはどうすればいいでしょうか。

あとPV25万、お気に入り1000件越えたようです。この場を借りてあつく御礼申し上げます。

物語は佳境です。今しばらくのお付き合いでお願ひします。

「第一回一。妹達を助けるためにはどうすればいいの？会議を始めますー」

「わーぱちぱち、とミサカは義理で拍手します」

義理言うな、義理とか。

「あんた達、こんな状況なのになんか脳天氣ね」

はいそこ脱力しない、姉よ。

「僕も参加するのかい？」

今は一人でも力が必要なんです、先生　冥土帰しことだ。

先生が用意してくれた部屋に俺、妹達19人、お姉様、先生がいる。妹達をどうやつたら救出できるのか、今後の行動方針を決めなればならない。まずは現状の認識からだ。

絶対能力者進化。最強の超能力者「一方通行」をまだ見ぬレベル6に進化させる計画。一方通行に経験を積ませることで進化する計画で、百二十八回もお姉様を戦闘及び殺害することで進化できるらしい。当然一人しかいないお姉様を殺害することは無理だ。その代用品として用意されたのが妹達である。二万人殺害すれば同様の結果を得られるそうだ。

経験による成長を調整するために戦闘はシナリオそつて行われる。

そのシナリオは時間、対象、場所、そして殺され方まで決められている。もっとも時間は多少ずれても影響はない。実際、昨日が開始日だったそうだ。その上実験は検体番号順に行われるため、1号から始まる予定だったらしい。襲撃によって延期されたのだから、まさに間一髪だ。

「今後も施設襲撃は行つたほうがいいのかな?」

「施設を襲撃しても引き継ぎが行われるだけでしょう、たしか今度引き継いだ研究所は183施設に及ぶはずです。オリジナルのお姉様なら襲撃は可能ですが、根本的な解決にはなりません、とミサカは推測します」

たしかに襲撃している間に他の研究所で行われたら、どうしようもないか。183も同時に襲う戦力はない。ネットワークテロも対策を取られていいだろう。

となると計画自体できなくする方法をとらざるを得ない。例えば一方通行の殺害。まあ殺害は行き過ぎかもしれないが、実験に協力しないように説得できないだろうか。しかし、一方通行のことにはなにも知らない。

「誰か一方通行のことについて何か知ってるか?」

「一方通行に関しては能力すら不明です、とミサカは申し訳なさそうに答えます。実験は情報が制限されており、実験のスケジュールと自身の実験内容、過去の実験結果しか知る権利がありません、とミサカは報告します」

「これは一方通行の能力の正体を思考し様々なアプローチを行うことで、一方通行が得る経験を増大させる目的があります、とミサカは補足説明します」

「そのため、1号の代わりに他の妹達がすぐさま代わって実験を行うことはないでしょう、とミサカは断言します。例えばアサルトライフルで攻撃する実験を行う個体とアサルトライフルで牽制しつつ地雷へ誘導する実験を行う個体を交代させた場合、後者は事前にアサルトライフルが効かない可能性を知っているため、別の攻撃方法を模索します。そうなるとこの実験はアサルトライフルで牽制しつつ別アプローチを行う実験に変異します。これは演算した実験内容と異なる上、この経験が蓄積されるため、進化にどのような影響を及ぼすのか不明になるからです、とミサカは長々しい説明を行います」

「そのためしばらくはこちらの搜索を優先するでしょう、とミサカは考察します。ただ樹形図の設計者でスケジュールを再演算したり、新たに妹達を作られる可能性もありますが、使用申請や製造には時間がかかるため数日の余裕はあります、とミサカは推測します」

うーむ話しがそれだが、すぐに実験が開始されないのがわかったのはいいことだ。それにしても、全て樹形図の設計者によつて予測演算された計画だから、イレギュラーに弱いんだな。話を戻そう。

「お姉様や先生はなにか知つてないかな」

「僕は知らないなあ」

「書庫で調べて能力はわかるけど聞いて呆れるわよ」
（パンク）

書庫はいわば能力者の情報などが載つた総合データベースである。とはいって、セキュリティがあつて一般人は閲覧できず最低でも教師か風紀委員の権限が必要だ。つまりハッキングしたんですね、お姉様。しかし、能力がわかるなら弱点とか攻めて勝てないだろうか。妹達が負ける前提が崩れるし、頼むるんじゃないか。

「一方通行の能力はベクトルの操作よ。運動量、熱量、電気量のあらゆる力の向きを触れた瞬間、任意に操作する能力なの。普段は重力や酸素とか必要最低限なものを除く全てのベクトルを反射するようにしていろらしゃいわ」

ベクトル操作 反射となると、一方通行に向かつて石を投げる
とそのまま投げた力で返ってくるのか？！

「といふことは」

「電気量や磁力を使う私達の能力では確実にやられるわ。樹形図の設計者も私と一方通行が戦闘した場合、185手で私が負ける結果を弾き出してるわ」

勝つて研究を頼むさせるのは無理そうだな。というかなんてチートだろうか。能力発動は基本意識的に使われるか、身の危険を感じた時だ。意識せずに使えるとなると不意な奇襲や狙撃も使えないというわけか。攻撃しても反射されて無傷。なるほど最強だわ。

「仮に勝てたとしても樹形図の設計者で再演算し、計画は修正され
継続されるでしょう、ヒミツカは予測します」

樹形図の設計者を利用する分、計画に不具合が起これば再演算されるため遅延はするが、継続してしまう問題もあるのか。

一方通行をなんとかするのは保留。ただ戦闘は無理ゲー。

別アプローチをしてみよう。妹達側はどうだろう。憑依前の世界はクローン製造は違法だったはずだ。クローン技術規制法だったか法律でも製造は禁止していたような。この世界ではどうだろうか。筋ジストロフリーの研究でクローン製造をこじまかしてたんだそしたら、後ろめたいのは確実だろう。

「クローン製造の違法性について計画を頓挫できないかな?」

「たしかに違法だね」

「クローン製造は国際法に抵触するわ。けれど、実験は人間としては間違ってるけど、学者としては正しいのよ。例え法を破り重いリスクを背負って人の道から外れてでも、成し遂げるべき学術だつてね。それに学園都市の法は統括理事会が握っている。そこが黙認しているんだもの。揉み消されて、捕まるわ」

ああそうだつた。量産型能力者計画のときも統括理事会が凍結したりしてたな。そもそも樹形図の設計者の使用は理事会の承認が必要なわけだから使用する理由も知ってるわな。

「じゃあ学園都市外に逃げて真相をばらすのはどうかな?外から圧力をかけて計画を中止できないかな」

幸いこちらにはお姉様が見つけた研究のレポートとクローンの実物がある。これらがあれば、学園都市自体に圧力をかけてもらい、計画を中止させられないだろうか。

「無理ではないだろ？ね。学園都市を疎ましく思つ者も少なくはない」

「ただ時間がかかるわね。それに学園都市は軍事的にも経済的にも他国を圧倒しているから、政治的な介入は難しいの。世論を動かすにも時間がかかるし、時間をかけすぎると証拠隠滅で妹達が犠牲になる可能性もあるわ」

案としては悪くはないが、時間がかかるのは厳しいな。

ならば統括理事会をなんとかできないだろ？か。研究の予算を握つてるもの統括理事会だし、樹形図の設計者も統括理事会が関わっている。

「統括理事会をどうにかできないかな？例えば、計画の反対派を煽つてみたり」

「僕は仕事柄理事会の人間は知っているけどね。確かに反対しそうな人はいるよ。理事会の中では少數派だね。だからできることにも限界があるよ」

そつちも無理かあ。

あれ、軽く詰んでね？

第一二二話（後書き）

多分批判が多いと思いますが、アサルトライフルのくだりは強引な説明です。

第一十四話

「ん？でも待てよ。わざと実験内容を知つたら再演算するって言つたよな。ということは樹形図の設計者を破壊した後、ネットワークで他の妹達に実験内容を知らせたら、再演算できなくなつて、計画は中止にできるんじゃないかな？」

樹形図の設計者はたしか安全のため人工衛星に載せられ、今は宇宙にある。だから衛星を操作し衛星を落としたりして壊せないか。

「確かに演算し直せなくなれば、できるかもしないわね」

お、これはいけそうか。

「計画はまだ始まつてないんだよね？もしそうなつたら一度新しく妹達を造り出して、計画をやり直すんじゃないのかい？」

……もし造り直すとしたら、今までの妹達は処分するだろう。まだ全体の1割ほどしかいらない妹達だから、十分に有利得る。この作戦も却下。

「計画がなくなつたら、僕の介入の余地もあるんだけじね。計画を潰す方法は他にはないかい？」

先生がいうには、計画さえなれば妹達の利用価値がなくなり身柄の確保がしやすいらしい。ようは先生の研究に妹達を加えるということだ。だがしかし計画を潰すと言つてもなあ。

直接の襲撃はダメ

—— 基襲うのは簡単だが、研究は他の研究所

に引き継がれる。また二百近くの研究所を襲うだけの戦力がない。

一方通行との戦闘はダメ チートスキルで勝てない。説得は居場所不明。

学園都市の外に出て圧力をかけるのは不可能ではないが時間がかかるため保留。証拠はあるので一番可能性があるし、お姉様の襲撃を揉み消したことから見ても公表は憚れるらしい。逆にいえば少なくとも学園都市内の報道統制は完璧だつてことだけ。

統括理事会の反対派はいるみたいだが、協力は得られなさそう。なにか今まで見落としがないか？

会議では結局決まらず、各自で案を考えてまた会議する予定だ。今は別室で一人考えている。しかしここまで状況が悪いとは。それに比べてこちらの手持ちのカードが少ない。

手持ちのカードは20人の妹達、計画のレポート、レベル5のお姉様、先生の存在だけだ。なにか他にカードがあれば状況は変わってくると思うんだけど。

「あんた、こんなところにいたの」

ほんやり考えているとお姉様が話しかけてきた。気付かない間に入室したようだ。

「ああ、うん。なかなか考えがまとまりなくてね、お姉様はなにか思い付いた?」

「残念ながらね」

学園都市圧搾の頭脳を持つお姉様でもダメか。

「ねえ」

「うん?..どうしたの?」

「あなたは私の事を恨んでないの?」

「ん?..どうして?」

「だって私がDNAマッチングを安易に渡さなければ、こんなことにはならなかつたはずよ。こんな命を弄ぶような実験.....」

「元々お姉様は騙されただけなんだ。筋ジストロフィーとかいう病気を治すために提供したんだよな。だったら騙した研究者が悪いんじやね」

「でも.....」

「まあなんつーか理不尽な現実には愚痴は言いたくなるけど、お姉様をどうこう思つ氣はないかな。どっちかってーと、クローンだから氣味悪がられるんじやないかって思つてた」

本来この件はお姉様は介入しなくてもおかしくない。自分のクローンが殺されるのは氣味悪いかもしないが、お姉様自身に影響は全

くないはずだ。

それでも彼女は介入し、妹達を助けようとした。若さによる青臭い正義感なのかもしれない、罪悪感や責任感なのかもしれない。しかし彼女の行動はほんの少しでも確実に妹達の命を守ったのである。

「だから、助けようとしてくれて嬉しかった。力を貸してくれてありがとう」「うー」

「……ちょっと臭かつたかね。なんだか陳腐なドラマみたいだな。恥ずかしくて顔が熱くなる。

「……姉を泣かせるんじゃないわよ、バカ」

「……俯きながらお姉様がデレた。もしかすると所謂シンデレ系な姉なのかもしれない。

覚悟を決めた。

少し目元が赤くなりつつ美琴は思つ。

00000000と出会い、まだ計画が終わっていないことを知つて、心は折れかけた。しかし、まだ懸命に生きようと足搔く彼女を見て、そして頼られてその責の重さを感じはしたが、その分救われた気が

した。

妹達は自分を責めようとはしない。生み出してしまった責任は間違いないく自分にある。その罪悪感から、むしろ責められたかった。だから頼られたときはその罪を少しでも購えると思つたのだ。

しかしそう簡単に解決できる問題ではない。結局会議は中断し、各自考え直すことになった。頼られた結果がこれでは会わす顔がない。しかしながらも思い付かない。少しいたまれない気持ちになりながら一人になろうとして入った部屋に彼女はいた。

妹達の中でも感情を持つ例外な彼女。彼女自身は自分のことをどう思つているのだろうか？こんな時になにを考えているのか と冷静な部分では自分を叱責したくなるが気になつて考えがまとまらない。結局意を決して聞いてみることにした。

結果は想定外だった。恨まれるどころかありがとうとまで言われたのだ。計画を知ったあとは何度も悪夢を見てその度に妹達に責められた。だが現実は全く違う。自分は赦されたのか。心が軽くなる。思わず涙が頬を伝つ。だが彼女には見せたくない。何故なら彼女は彼女たちは自分の妹なのだから。俯いて意地でも涙を見せないように平静を装つた……つもりだ。

彼女達をなんとしてでも助ける。でもどうすればいいのか。計画の首謀者を見つけ出して締め上げる？いや学園都市の上層部が支持している以上、計画は継続するだろう。誰だ？こんなイカれた計画を考えたのは？

樹形図の設計者か！学園都市が誇る世界一の演算能力を持つ超高度並列演算処理器。あれを破壊すれば学園都市もあとには退け

なくなる。しかしだだ破壊するだけではダメだ。どうすればいい？

さつき実験に調整された妹達が実験内容を知ることで再演算されると聞いた。しかし妹達がそれをしたところで、代わりがいるため、計画は続行するだろ？。ならば代わりのきかないものだとしたら？

一方通行。こいつしかレベル6になれないのだからこいつをどうにかすればいい。例えば交戦。計画はあくまで妹達と現状の一方通行だけで想定されたものだ。だからレベル5である自分が一方通行と戦えば？コントロールされた戦闘とは違い、大幅な歪みが発生するのではないか。

一方通行と超電磁砲が交戦し致命的なエラーが発生したため、計画の修復は不可能であり一方通行のレベル6への進化は不可能であるという内容の予言を吐かせればいい。勿論こんな都合のいい予言は普通でない。ハッキングして嘘の予言を吐かせ、破壊する。そうすれば分析を樹形図の設計者に頼っている研究者は、計画を継続できなくなる。

勿論自分もただでは済まないだろ？。樹形図の設計者を破壊すれば間違いなく捕まるはずだ。だが覚悟は決まった。

まずは一方通行と交戦した事実をつくらなくてはならない。もしかすると説得で済むかもしれないが。となると居場所を知らなくてはならない。書庫に再アクセスするか、研究所を襲撃すればわかるはずだ。

再び考え始めた00000号を残し、美琴は部屋をあとにした。

第一十四話（後書き）

私事で恐縮ですが

医者「僕の研究の為に、採血して魔法し……遺伝子提供してよ!」

そういう話しがあった時、なんかタイムリーなネタだなと思いました。

とある研究所の一室。一人の外国人の男が椅子に座り、爪を切つていた。足音が聞こえ扉に視線が動く。荒々しくドアが開けられる。

「ハロー。どうしました？ そんなに血相を変えた、ドクター天井」

入ってきた男は天井亜雄。片言の男の指摘通り血相を変えて、急いできたのか肩で息をしていた。

「ハローじゃない！ 何だこの引き継ぎ施設の数は！？」

正体不明の襲撃者によって研究所が閉鎖に陥り、絶対能力者進化実験が一時中断した。そのため、研究を他の研究所に引き継がせざるを得ない。天井は研究で発生する利権が分散するデメリットに目をつむり、研究の引き継ぎに渋々同意した。

その際、外部との折衝を行つたのは、この研究の責任者であるこの片言の男だ。天井自身あまり交渉事に向いていないことを自覚していた。そのため彼に引き継ぎに関する折衝を一任したのである。

引き継ぎ施設その数一八三基。いくら何でも有り得ない。これでは利権の全てを外部の連中に貪り食われるだけではないか！

「確かに引き継ぎ自体は承認したがな！ こんなに利権を分散したら」

利権が殆ど得られないではないか！ という前に片言の男が言葉を遮る。

「まあまあ落ち着いて。これくらい分散したところで利益は十分出

ます！」

「…………と言葉を飲み込み考える。確かにレベル6を生み出すことができれば莫大な利権が生まれるだろう。多少分散しても十分な利益は得られるがやはり一百近い分散は多過ぎる。

「今一番重要なのは樹形図の設計者が保証した実験を完遂する事です」

「まだ襲撃犯は捕まつていない。だから実験がまた妨害される可能性がある。しかしこれだけの数に研究を引き継がせれば、妨害されても実験を進行することができるはずだ。

「それに彼等と交わした契約書には裏がありましてね。利権を得られるのハ、計画終了時点で実験を行えるだけの機能を維持している研究所だけでス」

契約書には様々な取り決めがされていた。研究の機材の準備、費用は引き継ぎ先で持つこと。また、研究所を襲撃されようとこちらは一切責任を持たないということなどだ。つまりは研究所が襲われるば襲われるだけ、利権の分散を防ぐことができる。

「これで謎の襲撃者の心が折れるならそれで良し。足掻けば足掻くだけ我々の懐が潤う計算でス」

成る程、一理ある…………のか？天井は首を捻りながら考える。最も片言の男が言外に込めた意味には気付いていない。

この契約は計画終了時点で実験を行えるだけの機能を維持している

研究所のみ利権が与えられる。ならば機能を失えば、利用するだけ利用しただけで損失はゼロだ。例えば何らかの事故で機材が焼失したり、研究データが消されたり、正体不明の襲撃者が襲撃に成功すれば利権は得られなくなる。

天井の気付いていない表情で悟り、呆れる。

（ヤレヤレ、ドクター天井も研究者としては優秀なんですがねエ）

研究者にも色々なタイプがいる。天井は研究以外では知識が疎く、上手く立ち回れないタイプだ。

（まあその方が私としては『しやすいですガ）

片言の男は内心でニヤリと笑った。

「それより、計画の進行が遅れていることが問題でス」

「ああ、それはスケジュールを調整し直した。残りの妹達の製造を早めるように指示を出している。問題ない」

襲撃と引き継ぎの関係で実験の開始が遅れている。実験を短縮するため、実験の合間を詰めスケジュールを調整し直したのだ。結果、妹達の製造を早めることになった。

以前は研究所の妹達の生産ラインや収容数の関係で本来一ヶ月に2000～3000体程度が限界であったが、研究所の引き継ぎに伴い、残った全ての妹達を製造し管理できるようになつた。事実すでに各施設では一万八千もの妹達の培養をはじめている。

「逃亡した妹達も問題だ。造り直して計画を始めるにしろ、捕獲にしろ処分しないといけない。できれば貴重なサンプルである〇〇〇〇号だけは捕獲したいが」

ネットワークから消失した妹達の追跡は難航している。地下に逃走したようだがまだ見つからない。

「確かに、探索に割ける人員が不足しテいるんでスよね？」

「そうらしいな」

探索は人海戦術だ。人がいなければ当然効率が悪くなる。壁で覆われた学園都市から逃げられないとはいえ、学園都市自体も広大だ。

「なら話しあ簡単でス。探索班に妹達を加えればいい」

「！？しかし、逃亡する可能性が！？」

「勿論妹達の監視を付けてでス。今までの人員を監視役に回せばいい」

妹達の不始末は妹達につけさせればいいのだ。

「お姉様、そろそろ時間ですが、とミサカは注意を促します」

ああ一結局なにも思い付かなかつたな……どうしたもんだか。

「そう言えばオリジナルのお姉様がどこにもいよいよなのですが、なにか知りませんか、トミサカは問い合わせます」

「あれ？んなバカな。門限の時間……ではないよなあ。用事があるなら言つだらうし」

「んーどうしたんだ？さつきの感じだと、黙つて帰るなんて有り得なん……！？まさか何か思い付いたのか！？黙つて出たつてことは、自分一人で危険なことをやるつもりかもしない！…杞憂で済めばいいけど、嫌な予感がする！」

「まずはいな、お姉様を探しに行つてくる！お前達は待機してくれよ！」

まだ時間はそんなに経つていない。お姉様、無茶はしないでいってくれよ！

まだ夕方だから人通りもそれなりにある。お姉様がいなくなつて時間があまり経つていなかつたらすぐに見つかるかと思ったけど、この中からお姉様を見つけるのは非常に困難だ。ネットワークの存在があるから、追つ手がきても対処できるように俺のみ出てきたけど早まつたか？ああもうネットワークで妨害できればいいのに！

……あ、そうか！自分の能力で電磁波の膜みたいなものを造りネットワークの電波を遮断すればいいのか！なんで単純なことに気付かなかつたんだろう。発電能力応用力高すぎだよな。

……できるにはできた。思ったより消耗が激しい。使い続けるとなると妹達じやすぐに電池切れを引き起こすかもしれない。やはり俺一人でいくしかないか。早く見つかるといいんだが。

携帯端末を操作し、書庫にハッキングする。セキュリティは高いがレベル5である美琴にしてみれば無いも同然だ。調べるのは一方通行の情報。　　あつた。住所もわかる。あとは本人に会うだけだ。

調べたマンションに一方通行はいなかつた。まさかもう実験は始まつてゐるんじやないか？と一瞬不安に過ぎつたが、妹達の話が正しければそれは有り得ないだろうと考え直し、ただ出掛けているだけだと判断する。待つていてもよかつたのだが元々気が短い美琴は周辺を探すこととした。

河原。高架下の陰に一人の少年がいた。短髪で白髪、肌は白く、線が細いので一見少女のようにも見えるが、やはり少年である。爛々と輝くような赤い瞳はただ氣だるげに地面にはいつくばる男達に向けられていた。

「オイオイ、もう降参ですかア。これだけ弱い雑魚のクセになんでこの俺に喧嘩売つてきてるンですかア」

男達は誰ひとりとして無事ではない。大半が虫の息で意識を保っている者は少数だ。頭や手足を怪我して血を流している者ばかりであり、中には武器として持つてきたであろうバットはひしゃげ、その持つた腕ですらあらぬ方向に曲がった者、地面に使われていた筈のコンクリートが破片になつて突き刺さつている者もいる。

「ひいッ…………！」

他の者に比べ幾分か軽傷 といつても頭から血を流し、左腕は脱臼しているようだが、の男は完全に怯えきつて少年から逃れようと必死だ。しかしその思いも虚しく腰が抜けているせいか力が上手く入らず不様に足をばたばたとさせることしかできない。

「あン？自分だけ逃げるつもりかよ。といつか喧嘩売つておいて逃げられると本気で思つてるならおめでてヨな」

そういうて近寄つてくる恐怖の象徴に男は意識を保つことはできな

つた。

「チツ……！」

少年は男を一警したあと舌打ちし、傍に置いていたコンビニのビニール袋を拾い上げる。袋には一杯の缶コーヒーが入っていた。

元々少年は近所のコンビニで缶コーヒーを買いつもりで出掛けたのだったが目新しいものが無かつた。そのため他のコンビニまで遠出したのだった。袋の中身の缶コーヒーはどれとして同じ製品はない。学園都市は実験都市だ。それは飲料や他の日用品にも当て嵌まり、外では見かけないような新製品も多くある。そのため自販機やコンビニで全く違う商品が並んでいることも珍しくはない。

で遠出した結果がこの惨状である。もつともこの光景はいつものことだ。大概は今回と同じように徒党を組んで襲つてくる。そしてその全てを返り討ちにするのだ。何一つ例外はない。変わらない現状に少年はウンザリしていた。

彼の名は一方通行。学園都市のたつた七人しかいないレベル5の第一位。レベル5には序列があり、能力の強さだけではなく能力の希少性や研究としての価値も含めて決められている。だが彼は希少性や価値もさることながら、純粹な能力の強さで他のレベル5を圧倒していた。まさしく学園都市の『最強』の能力者なのである。

しかし最強という称号は争乱を引き起し、す呪いに過ぎなかつた。

超能力者に憧れ学園都市を訪れる者は少なくない。脳の調整を行えば簡単に奇跡のような技が身につくのだ。自分ならひょっとしたらすごい能力が眠っているのではないか? そう可能性を信じて疑わな

い、いや夢見て訪れる。 そして現実を知るのだ。

能力者の大半はレベル1かレベル0である。当然訪れた者もレベル1や0になるものが大半になる。しかしが学園都市ではレベル3からがエリート扱いであり、事実上位の学校では入校の条件にレベル3以上であることが必須条件に含まれる位だ。つまり、学園都市ではその者達は無価値 落ちこぼれと分類されるのである。

そんな彼等はどうなるのか。大半はカリキュラムに勤しみ能力が上げようと努力するだろう。しかし努力が実らないと感じたときどうなるだろうか？結果、夢を諦め、能力があるものを妬む。

これは彼等だけではない。レベル5と分類されなかつた能力者も同様だ。研究の利用価値がないと判断されたものや進化できないと感じたとき同じ状態に陥る。

それがきつかけになり、スキルアウトと呼ばれる無能力者の不良集団になつたり、学園都市内で犯罪を起こすのだ。

そうした彼等は能力ある者を憎む。学園都市最強の超能力者

その肩書は憎しみの矛先が向けられるのに十分な理由だつた。単純に最強を倒すことで名声を得ようとする者、研究者や能力者を見返そうとする者、最強に成り代わろうとする者、様々な理由を抱えた暴力が一方通行に向けられるのだ。

その度に相手の心が折れるまで叩き潰す。それが彼のやり方だ。元々幼い頃から非人道な実験を繰り返してきたし、今更自分が善人ぶる必要はない。だがこんなことが繰り返されるとウンザリするのだ。最強になれば解放されると思っていた。しかし環境は何一つ変わっていない。『最強』止まりではダメだ。もつと超越した何かになら

なければ 挑むことさえ馬鹿らしくなるような無敵の存在にならなければ変えられない。

そう考へてみると缶コーヒーが落ちた。ビニール袋が破れていることに気がつく。どうやら先の争い中に誤って破片か何かが当たつたらしい。こんなことならば、持つておいて反射するように設定すればよかつたと思い、一方通行は舌打ちする。そして拾おうとし転がつたほうに目を向ける。すると先に拾い上げる手が見えた。拾い上げたのは一人の少女だった。

お姉様見つからぬーてかここどこよ？土地勘もなしに出かけるもんじゃないね。お姉様を見つけないと病院まで無事戻れるんだろうか……。まさかの迷子フラグに途方に暮れる。お姉様ー早く来てくれーーあれ、なんか趣面が変わったようだ。

橋の傍の階段を降りる。カラソと何か落ちたような音。転がってきたのは缶コーヒー？空き缶は「ミミ箱へーてこんなことしてる場合じゃないな。と思つたけど空き缶じゃないやこれ。てか漢の浪漫コーヒーって。どんな味するんだ？

「おイ」

声をかけられたほうに顔を向ける。そこには白髪の男がいた。なんとかつかれだな。風体がチンピラモヤシだな。うん。

周りが血だらけな男や有り得ない方向に曲がった腕やら橋の柱に向かって犬神家してる奴がいるようなバイオレンスな世界を視界にお

さめながら、そう失礼なことを考えていた。

絶対コレ面倒事フラグだ！

右手に缶を左胸は早鐘を。回る世界はバイオレンス。

いやはや周りにたくさんいる重傷者は多分あのチンピラモヤシにやられたんだろうけど。放置するとヤバくな。

「おイ」

なんですかチンピラモヤシさん。そんなモヤシさんの手には破れたコンビニ袋。それと辺りには沢山の缶コーヒーが散らばっていた。どうやらこの缶コーヒーは彼のものらしい。

「えっと……」「ン」

男の浪漫コーヒーを手渡す。微妙な空気になりながらも男は黙つて受け取つた。ついでに他のも拾い上げるのを手伝う。どれもこれも微妙な商品名だ。スーパーでも変な商品を見かけたけど売上的に丈夫なんだろうか。とにかく空気が重いので適当に片付けたら逃げよう。

全て二人で拾い上げる。よし逃げよう。あと重傷者のために人呼ばないと。携帯も無いし、警備員や風紀委員にバレると面倒だけどほつて置けない。

「おイ、お前超電磁砲か？」

…………どうやらお姉様のことを知っているらしい。女子校のお姉様がこの男と知り合いは考えにくいけど、お姉様は有名人だからなあ。

ファンとかなにかかな？友達だつたらお姉様の交遊関係はある意味すごい。

「いや違う。…………妹だ」

迷つたけど下手にござまかしても意味なさそうだしな。

「妹？…………ひょっとして実験の関係者か？」

実験の関係者…………思い付くのはあの計画。実験を知つていろつてことは関係者か？！一気に警戒レベルを上げる。いつでも逃げられるように身構えた。

「…………あんた誰だ？」

「聞いてねエのかア。これから一万多回も面倒臭エ実験に付き合つ仲なのによオ」

実験に付き合つてことはこいつ、一方通行か！？

「で、実験は延期してるはずなのに、なんで妹達が屋外にいるんだア？」

この口ぶりから察するに一方通行は実験を知つてている。あんな非道な実験に協力するつもりらしい。

「…………どうして」

「あン？」

「どうしてあんな実験に協力しようとするんだよ！あんた学園都市どじるか世界でも最強の能力なんだろ！？だったら無理にあんな実験に参加しなくつたつていいじゃないか！」

これだけ沢山の男に囲まれても勝てる実力。実際軍や国を相手にしても勝つような実力なんだ。だったらレベル5のままでも十分じゃないか。

「そりゃあ、絶対的なチカラを手にするため。レベル5だとか学園都市で一位だとか、そんなつまんねエもんじゃねエ」

一方通行が男達を一瞥する。

「コイツら見てみる。学園都市最強の座を狙つて突っ掛かってくるバカどもだ。つまり最強程度じゃこんなバカどもが遊び半分で挑んでこよつと考える。それじゃダメだよなア」

右手を突き出し虚空に掲げ拳を握る。まるで届かない目標を掴むような仕草だ。

「俺に挑もうと思つ事すら許さねえ程の絶対的なチカラ。『無敵（レベル6）』が欲しーんだよ」

……そんなことの為に妹達は犠牲になるのか！沸々と怒りが沸き上がつてくる。けどそれと同時に何故かこいつは戦いたくないんじやないかと思つた。実験に参加してることや周りの惨状を見れば何言つているんだと思つけど。なんか単純に受け取れば戦いたくないから強くなろうとしてるように聞こえた。そつ思つと怒りが収まつてくる。

「なあ…………ほんとに絶対的なチカラを手に入れたら、誰も挑まなくなるのか？」

「あア？」

「結局手に入れたって今と変わらないんじゃないか？最強になつた時だつて変われたのか？」

「…………」

「だつて今やるうとすることは研究者が用意した実験に過ぎないんだぞ。そんな他人が用意したモノで周りは変わるのか？自分だけが変わつても意味がないだろ？周りと一緒に変わらなきや、変えていかなきや何も変わらないんじやないか？」

なかなか変えられなくて困つてるのが現状だしな。妹達が人扱いされない事、実験の事。

「例え変わる可能性があつたとしても、二万人もの妹達を殺していくことじやないだろ！俺達はお前に殺される為に生まれたんじやない！」

思わず叫んでしまつた。怒りを抑えきれなかつたらしい。

「なに…………？」

黙つていた一方通行が急にほんの少しだが表情を変えた。…………？この反応もしかして…………知つていなかつた？かい摘まんで俺が知つていることを話す。

全部を聞いたあと一方通行は笑いはじめた。

「ククク、ハーツハツハツハ……！」

口を歪ませるほど楽しくて仕方ない。そんな表情をしながら、ただひたすらわらわらう。

自分は善人ではない。むしろ対極にいるにいる悪党だと一方通行は自覚している。だからこそ、悪党に相応しいこんなクソッタrena計画の内容を知つてわらいが止まらなかつた。

一方通行が計画の参加を持ち掛けられたのは一ヶ月ほど前だ。その時もまた今の状況に似ていた。いつものように最強の座を狙うバカどもと一戦終えたところに声をかけられた。大概自分に近付いてくるのは前述のバカか、自分を研究して甘い汁を吸おうとするくだらないヤツらばかりだ。そんな話に興味など沸かない。だから今回も断るつもりだつた。

だが今回は違つた。

「『最強』どまりでは君を取り巻く環境はずつとそのままだろうね」

声をかけてきたサングラスの男はこう言つてきたのだ。そして『最強』の先『絶対能力』が環境の変化を齎すかもしれないとも。更なる高みに興味が沸けば連絡してほしいと言い残し男は去つた。

一方通行が連絡を入れるのに時間はかからなかつた。

連れてこられた研究所で見たもの。それは沢山の培養器で製造されている少女たち 超電磁砲のクローンである妹達だった。

国際法で禁止されているクローンを大量生産するなどハナからまともな実験ではないだろ？。類は友を呼ぶというが悪党は悪党を呼んだということか。

だが内容としては拍子抜けするようなものだつた。二万通りの戦場を用意して一万のクローンと戦闘するだけという内容。一方通行はただひたすら戦うだけだ。

だが始めようとした時に事故があつたらしく、実験は延期。再開する際に連絡がくるはずだった。

クソッタレな外道が関わる実験だ。ただの実験じゃない。心の中ではそう思つていたが、二万体を殺害すると聞いてわらわざにはいられなかつた。

やはり悪党は悪党でしかないのだ。

なんで笑つてるんだ、こいつへビうじいいかわからなくて苛々としてくる。

「イイねエイイねエ！ハハハ！－！」

最高にハイな状態になつてゐる一方通行。できれば関わりたくない。が関わらないわけにもいかない。

実験の詳細までは知られていなかつたらしい。もしかすると説得可能かも。

「なにがおかしいのかわからんが、実験の事、知らなかつたのか？ だつたらこんな実験に協力しないでくれないか。頼むから妹達の命を助けてほしい。お願ひだ」

一方通行が実験に参加しなければ計画は成立しない。そうなればこの時点でこの話は終わるんだ。頼む！ 叶ってくれ！

笑いをやめ、一方通行がこちらに視線を送る。

答えは
。

第一一十七話（後書き）

携帯でわざわざの難しそうの漢字が出ないのとで平仮名です。

なんか一方通行さんは口調やえいをつければ一番書いて楽しいキャラですね。原作でも好きなキャラですが。

第一十八話

答えは 。

待つている間の静寂が重苦しい。これ次第で大きく運命が変わるから当然か。

しかしその静寂はほんの僅かの間だけだった。

はあはあはあ。ここまで逃げれば大丈夫だろ？ キヨロキヨロと辺りを見回す。今のところ人の気配はない。一息つき壁にもたれ掛かる。

一方通行と話している時ふと人の気配に気付いて見てみるとスース姿の男達が取り囲んでいた。一方通行目当てではなく、どうやら俺が目当てのようで一斉に取り抑えにきた。どうやら追っ手のようだ。なんとかかわし、手の平の電撃をまばゆく発光させ、男達の目を眩ませたあと逃げ出してきたのだ。

しかしながら間が悪いんだろう。こんなタイミングで来なくともいいのに。 答え聞けなかつたな。一方通行が実験に参加しなければ、妹達を助けられるかもしれないのに。

けど可能性が無いわけじゃない。もう一度接触しないと。しかし今回一件でこの周辺は警戒されただろう。悔しいがほどぼりが冷める

までは大人しくしたほうが良さそうだ。……それにしてもお姉様はどこに行つたんだろ？

スーツ姿の男達が少女を追い掛けていき一人残された一方通行は帰路につく傍ら、電話をかける。長い呼び出し音のあとに電話に出たのは女性の声だった。

「あら、あなたから電話をかけてくるなんて珍しいわね。実験再開の日程は事故のせいでまだ未定よ？」

「あア？ オマエラの不手際が原因だろ？ が。だいたい妹達が逃げ出したなンて、管理も口クに出来てなくて大丈夫ですかア？」

「！？……どこでそれを」

「さつき見かけたからな。それより実験でクローンを殺害する事をなンで黙つてた？」

息を飲む音。しばらく沈黙が流れた。

「そう知つてしまつたのね……」

「しかもレベル5のクローンと戦えるからテンション上げてたのに、レベル3の雑魚に過ぎないんだろ？ 一萬回もお人形さん遊びするような歳じゃないんだぜ？」

「オリジナルとの性能差は否めないわ。その代わり銃器で武装されるし、彼女達はネットワークで記憶を共有できるから実験を行う度に学習し進化していくわ。経験を積んで強くなるはずよ」

「どちらにしても俺に黙つてたつてのが気に入らね。なんなら計画を潰したつていいんだぞ？」

静かな威圧。それは電話越しでも伝わつただろう。

「…………そ、たしかにあなたの協力が無くなれば、実験はできなくなるわ。…………まあどちらにしても彼女達は助からなければ」

「あア？」

「元々彼女達はレベル5を量産する計画が失敗して、この計画に組み込まれた存在よ。だから実験が無くなつた場合、処分されるでしょうね」

日も暮れ、最早人通りも無くなつてきた公園のベンチに座りコーヒーを飲む　さつきクローンが拾い上げた缶コーヒーの一つだ。

それは今の心境を表すかのように後味の悪い。

例え自分が実験を辞めようと何も変わらないのだ。すでに2000のクローンが存在し、今18000もの個体を製造しているらしい。ただこの実験のためだけに生み出された存在　　ただ一方通行に

殺されるためだけに生み出された存在なのだ。もし実験を今辞めれば、存在意義を無くし処分されるのだから、寧ろ彼女達の生存時間を縮める結果にしかならない。

どちらにしても既に一万の命の重みを背負っていたのだった。

（今やううとする）とは研究者が用意した実験に過ぎないんだぞ。そんな他人が用意したモノで周りは変わるのか？

あのクローンの言葉が響く。この実験も今までの実験と何ら変わらない。研究者が敷いたレールを進んでいるに過ぎないのだ。そのレールから抜け出すことが出来ずにはいる。だからあのクローンの言つようになんにどんなに犠牲を払つても今までと同じで何も変わらないのではないのだろうか。

だがしかし。どうすればいいと言つのだらう。クローン達を救うのか？ 悪党である自分が？ 今更ヒーローにでも成り代わるつもりか？

それはない。自分はヒーローにはなれない。悪事に手を染め続けた自分ではヒーローにはなりえない。何も変えることのできないヒーローなんて必要はない。 そう自嘲した。

ならば突き進む。例えそれが手を汚す結果にならうとも、その罪を背負う。悪党は悪党で居続けなくてはならない。

「アンタ、一方通行よね？」

今日はつづづく来客が多い。しかも先程の少女と全く同じ顔だ。違うところと言えば「一グルがあるかないかぐらいだろうか。

「お前クローンか？ オリジナルか？」

それを聞いた少女は元々剣呑な顔をより厳しいものに変えた。

「オリジナルよー。アンタやつぱり実験のこと知ってるのねー。」

「あア、オマエのクローンには世話になるんだぜ。俺の無敵化を手伝ってくれてんだ。感謝しなきやな」

「フザケんじゃないわよー。あの子達はアンタに殺される為に生まれてきたんじやないわー！」

（俺達はお前に殺される為に生まれたんじやないー！）

クローンとの言葉が重なる。容姿だけじゃなく考えも瓜二つだと感じていた。

「オイオイ、人聞きの悪いな。人殺し見てエな事言つなよ。俺が相手にするのはボタン一つで造れるオマエの模造品だぜ。人形に何ムキになつてんだ？」

そういうて一方通行はニヤリとわらつた。少女の怒りに呼応するかのように、全身から電撃か瞬き始める。

「それ以上あの子達を侮辱するなあああああ————！」

その言葉と同時に少女の体から発せられた幾筋もの雷撃が一方通行を襲う。しかし一方通行に接触するか否かの時点で、不自然に雷撃が曲がった。まるで一方通行を避けるようだ。

それが彼の能力。ベクトル操作。学園都市最強の力。

「なんだ、同じレベル5というから期待してたんだが、大したことねエな。ほんとにオマエ常盤台の超電磁砲かア？」

否と答えるかのように、少女 美琴は攻撃の手を休めない。事前に相手の能力は調べてある。自身の能力が通用しないことは十分に想定済みだった。

美琴が地面を蹴る。すると黒い砂鉄が舞い上がった。砂鉄は渦を巻きはじめ竜巻と化し、一方通行を飲み込んだ。砂鉄の嵐に飲み込まれれば対象はズタズタに引き裂かれる。しかしそれは普通ならばだが。

「ふーん、磁力で砂鉄を操つてんのか。おもしれエ使い方だ」

相手は普通ではない一方通行だ。その嵐の中ですら平然として能力の分析まで行つ余裕がある。

「ま、タネが割れたらどうつて事ねエよな」

嵐の中で渦の流れを演算し、ベクトルで操作する。途端に嵐は止み只の砂鉄に戻り舞い散った。

これも通用しない

事前に能力を知つてはいるが、全力を出し

ても悉く通用しない現実を美琴は苦々しく思った。元々の目的はこのまま続ければ達成できるだろう。しかし妹達を嘲笑つた一方通行に一撃を入れなければ。そうでないと怒りが収まらない。そう思つて全力で攻撃しているのに、一撃を入れることすらできない。それ程までに第三位と第一位とでは遠いのか！

ポケットからコインを取り出し、構える。そして親指で弾いたコインが一條の光となつて一方通行を貫く！これが第三位の代名詞ともなつた超電磁砲！

一方通行を貫くはずだったコインが美琴の頬を掠めた。それは一方通行の反射。何物も通さない絶対防御。それは超電磁砲も例外ではなかつた。

「さて」

自分の絶対的に信頼していた技をいつもたやすく反射され、一瞬呆ける美琴に一方通行が声をかける。

「次はこっちの番だ。そのザマジヤあンま期待できねエが、ちつたあ楽しませてくれよな三ツア」

第一十九話

一方通行が地面を蹴ると美琴の間合いを一瞬で詰め、腕を掴む。

「！？ しまつ……」

「捕まえたア」

「イと笑うと美琴をぶん投げ地面に叩きつけた。

「くはッ…………！」

受け身も取れず背中から地面に叩きつけられたため、一時的に呼吸ができなくなる美琴。しかし、相手は最強だ。追撃に備えて素早く身を起こす。

「さつきの砂嵐は面白かったなア。たしかこんな技だつたか？」

また地面を一蹴りすると今度は竜巻が起こる。最も先程美琴が起こした倍ほどの大きさがあり、砂鉄だけではなく砂利や砂も含まれたものだ。それが美琴に牙を向けた。

かわすのは不可能だ。ならば相殺して少しでも威力を弱める。美琴は素早く演算し、大地を蹴る。先程と同程度の竜巻ができ、一方通行の竜巻の進路を遮つた。

互いの竜巻が接触し押し負けつつも美琴の竜巻は一方通行の竜巻の進行を遅らせることに成功した。とはいえる一時的なもので想定通り美琴が創つた竜巻は押し負け飲み込まれて散る。想定外なことに殆

ど勢いが衰えてはいない。しかし時間を稼げたお陰で街灯を日掛けで磁力による移動を使い竜巻の進路から離脱できた。そのまま竜巻は樹木をへし折り巻き上げながら進んで自然消滅した。

間違いなくあれを喰らえば無事では済まなかつただろう。ぞつとする。攻撃の手を休めればそれ以上の苛烈な攻撃が襲つて来るだろ。う。街灯やベンチなど近場にあつたものを磁力で操作し一方通行に向けて投げつける。とにかく隙を作らせない。だが一方通行に当たりそうになると街灯は折れ曲がり、ベンチは碎けた。

「もうネタ切れかア？大したことなさすぎンだろ」

息切れを起こし始めている美琴と比べて一方通行は全く消耗した気配がない。先程までの興奮や楽しいといった感情が抜け落ち、顔に残つたのは落胆。

「もういい。飽きた。とつとと止め刺してやンよ」

そこからは一方的な蹂躪だつた。美琴も反撃はするが、どの攻撃も一方通行には届かない。逆に攻撃を反射され、それが牙を向けてきたり、近辺の街灯などを投げつけてきたり、先程のように掴まれ投げ飛ばされたり、蹴り殴られた。

美琴はそれでも諦めずに何度も立ち上がり攻撃するが次第に反撃できなくなつていき、立つてゐる時間も短くなつてゐた。

「ツ　　！　！」

美琴は声にならない悲鳴をあげる。一方通行は地に伏した美琴の髪を掴み上げたからだ。もう傷が無い所はない。服はボロボロ、手足は切り傷や打撲ができ、鼻や口からも血が流れまともに呼吸すらできていなかろう。

最早彼女に反撃するだけの力はない。能力はすでに限界を終えている。最も演算を必須とする超能力では今の意識が朦朧とした状況で使えないだろうが。

重力を操作し美琴を掴み上げたまま跳ぶ。自重に髪の一部がぶちぶちとちぎれるがまだ美琴を支えていた。そして一方通行はある程度飛び上るとパッと手を離した。

ドサリ　　地に落ちた美琴はピクリとも動かない。ゆっくりと一方通行は降り立ち、それを確認したあとその場を後にした。

無事に男達を巻き、なんとか病院に辿り着いた時にはもう夜だった。結局お姉様には会えず仕舞い。すれ違いで病院に戻つていればいいが、どうしたものだろうか。

「お姉様、戻られたのですかとミサカは確認します」

「オリジナルのお姉様とは会えましたかとミサカは問います」

妹達が出迎えてくれた。どうやらお姉様は戻つていないうつだ。

「ただいま、結局お姉様は見つからなかつたよ。その口ぶりだとこつちには戻つてきていないうだな。一息ついたらまた探しに行くよ。あと追つ手がいたから、みんななるべく外に出ないようにな」

追つ手がいる以上あまりみんなを外には出したくない。お姉様を探すのを手伝つて欲しいがリスクが大きすぎる。仕方ないもう一度一人で探しに行こう。

外に出る。やや騒がしい。どうやら急患が運び込まれてきたようだ。ストレッチャーで運ばれていく急患の姿が目に留まる。

見るからに痛々しく血まみれの姿でボロボロだつた。

(なんで ?)

だけど見覚えのある姿。

(お姉様が ?)

カエル先生の話によると 一時は本当に危なかつたらしい。心停止も起きていたようだ。傷や全身打撲はいうに及ばず、鼻やあば

らが折れ、一番酷いのは左腕を複雑骨折したらしい。今も意識は戻つておらず絶対安静が告げられた。

見つかった場所は昨日の橋の近くの公園。能力同士の私闘があると報告を受けた風紀委員が見つけたらしい。現場を見るからに苛烈な戦闘だつたらしく、一帯は更地の上、ところどころ大地がえぐれ、街灯などの破片が転がっていたそうだ。

倒れていたのが第三位のレベル5ということもあり一時騒然としたそうだ。本来逆に倒すことがあっても倒されることがないのが当たり前の実力を持つレベル5が倒れていたのだから当然だろう。

お姉様を倒したのは誰か。状況証拠でしかないが、ある種確信があった。レベル5で第三位であるお姉様をここまで一方的に倒せる相手。見つかった場所。これは……一方通行の仕業だろう。

おそらく俺と会った後にお姉様が一方通行と遭遇、恐らく実験のことで戦つたのだろう。結果は悔しいが樹形図の設計者が予言した通りといふことか。でなければレベル5であるお姉様が負けるなんてことは考えにくい。他のレベル5の可能性がないことはないが場所が場所だけに一方通行の可能性が高い。

これはつまり一方通行が敵に回ったということか。

くそつ、なんである時もつとよく探さなかつたんだ！そうすればお姉様があんな目にあわなくて済んだかもしれないのに！ああ、畜生！

容態は安定したとはいえ、未だ意識が覚めないお姉様。絶対安静面会謝絶なため傍にいて看病することもできない。何もできないという無力感に苛まれながらネガティブなことばかり考えていた。

お姉様のこと、一方通行のこと、妹達のこと、砥信さんのこと、実験のこと。

どうすればいい?なにができるんだ?不安や焦燥で考えがまとまらない。実験開始のリミットが迫つてくる。だが解決策は見つからず只時間を浪費するだけだった。

ああくそー!苟立ちの余りに壁を殴りつける。

「大丈夫ですかお姉様、とミサカは心配します」

「大丈夫だ!」

思わず声を荒げてしまう。……。

「…………すまん」

「いえ気にしないでください」

「ほんとにどうしていいかわからないんだ。お姉様は倒れてしまつたし、一方通行は敵に回つた」

状況は悪化している。打つ手は殆どない。

「ならば学園都市の外に逃亡しますか、ヒミツカは提案します」

外に逃げる。学園都市は壁で覆われており外部からの出入りを制限している。警備も厳重で通常であれば逃げるのは難しいだろう。元々はお姉様がいれば突破できる可能性が高かつたが今は武装でもしなければ難しい。

それにこの案を保留した訳は時間がかかるということ。それはつまり 他の妹達を見捨てるということになる。例え外部から助けを得られたとしても、実験で犠牲になる妹達が出ていることだろう。正直な所、今の状況はかなり酷い。その中で妹達のことを助けるのは困難極まりない。だから諦めるか？

お姉様の姿が脳裏に過ぎる。傷だらけで生きているのが不思議なくらいボロボロの姿。一方通行はお姉様にしたように残虐に殺すだろう。そんな目に妹達を逢わせたくない。

「絶対にそれはダメだ」

しつかりしろ！お姉様が倒れた今、自分達以外助ける人はいないんだから。頬を叩き気合いを入れ直す。お姉様は最初一人で戦つんだ。自分はまだ妹達がいる。だからやらないでどうする！

…………？ そういうやお姉様は昨日何をやろうとしてたんだ？ たまたま一方通行と遭遇して戦闘になつたとは考えにくい。あの状況だと実験を止めるために動いていたはずだ。一方通行と遭遇しただけならば逃げるべきである。一方通行から攻撃してきたんだろうか？ いや考えにくい。一方通行が戦うことで得るメリットがない。あの時の

不良達も一方通行を襲つたから、反撃されたに過ぎない。

となるとお姉様が意図的に会い、お姉様から戦つたことになる。目的は一方通行の排除か？いや樹形図の設計者や能力を知っているとなると、負ける可能性が高いとわかつていた筈だ。では何のためだろ？

「なあ、お姉様はどうして一方通行と戦つたんだと思う？昨日恐らくお姉様は何かを思い付いて、実験を止めるために一方通行と戦つたんだと思うんだけど」

「確かに一方通行を倒すなら能力から考えてこちらに勝ち田はないでしょ、とミサカは推測します。となると、寧ろ戦うこと自体が目的なのではないのでしょうかとミサカは結論付けます」

戦うこと自体に意味があつた？お姉様と一方通行が戦うことでどうなるんだ？

実験は妹達を二万人殺害し、その戦闘経験を得ることで成立する。元々一二八人のお姉様を殺害する予定だったが用意できなかったためにこのようになったのである。だから二万人の妹達の代わりにレベル5のお姉様一人が戦つたところで完了するわけじゃない。しかも殺害されていないのだから実験自体も完了したわけじゃないし。

あれ……待て待てよ。

確かに殺害されることが実験のプロセスに含まれている。しかしゲームとは違う相手を倒さないと戦闘経験が得られないわけじゃない。殺される前までも確実に蓄積されるものだ。

「一方通行とお姉様が戦うのは計画外の戦闘だよな。となるともし

かして今までスケジュールされた実験通りに進められないんじゃないか」

スケジュールは緻密なものだつたはずだ。ならばレベル5一人が戦えばどうなるだろ？単純に数百人の妹達を実験に相当する経験を得、それが実験の短縮に繋がるのか？

「そうですね。恐らく計画外の戦闘は樹形図の設計者の予測演算に誤差が生じ、修正できない程の歪みである場合、実験は停止するでしょう、とミサカは予測します」

これがお姉様の狙つた事は！レベル5が全力を尽くした戦闘だ。となると演算の誤差は大きいはず。

「ですが樹形図の設計者が有る限り再演算され実験は継続されるはずです、とミサカは断言します」

「それに実験の修正が必要かどうかは樹形図の設計者でないと判断できないのではないでしようか、とミサカは疑問を投げ掛けます」

「そうか樹形図の設計者がある限り、この実験は修正できる。研究者は機械の言いなりに動いているのだ。それに都合良く修正が必要だと演算されるかはわからない」

「だったら、樹形図の設計者に嘘の演算を出させて壊せばいい」
そこまでがお姉様の計画だつたのかもしれない。本来一方通行との戦闘は余力を残した上で切り上げる筈だつたんだろう。しかし、一方通行が予想以上に強すぎて余力を残せなかつたのかもしれない。

お姉様は一人で終わらせようとしてたのか……もしそうなら意識

が戻った時お仕置き決定だな。全くもう少し頼つてほしい。

けど道は切り開いてくれた。ありがとうお姉様。絶対にその行為は無駄にはしない。

となると、俺達が次に行わなきやならないことは決まった。

世界最高のスーパー・コンピュータ「樹形図の設計者」と交信を行つ
情報送受信センターの襲撃及び「樹形図の設計者」の破壊。

お姉様が作ってくれたチャンス。必ずモノにしてみせる！

唐突だが、学園都市の地理について簡単に話そう。

学園都市には一三の学区が存在する。各学区はそれぞれ特徴みたいなものがある。まことに特化させたエリアや特徴的な施設があると考へてもらえればいい。例えば、行政関係を集めた学区、外部からの来賓を迎えるための学区、研究所を特に集めた学区、商業施設を集めた学区などだ。ちなみにカエル先生の病院は第七学区になる。その中でも航空や宇宙開発を専門とする施設が多く集まつたエリアがある。それが第一三学区。最先端のロケット発射場がある学園都市宇宙センターや樹形図の設計者との交信を行う施設である情報送受信センターがあるエリアだ。

『樹形図の設計者』情報送受信センター 世界最高のスーパーコンピュータである樹形図の設計者の窓口となる最重要機密施設である。ここから決まった時間に樹形図の設計者と交信し、予測演算させたいデータを送信したり、その演算結果を受信する。ここ以外にデータの送受信は出来ない。唯一の窓口なのだ。

蛇足かもしれないが、樹形図の設計者についても説明しよう。樹形図の設計者は世界最高峰のスーパーコンピュータである。学園都市の天気予報はこれによって演算された予報であり、何時何分に雨が降るなど正確に演算できるほどだ。

樹形図の設計者は何故人工衛星に載せられているのか これは樹形図の設計者の性能が他国のスーパーコンピュータを遥かに上回る性能のため、様々な組織に狙われており奪われないように宇宙に

退避させたのである。学園都市を除けば普通宇宙にロケットを飛ばせるのは特定の国家ぐらいしか存在しないし、打ち上げた時点でどの国が打ち上げたかは特定が容易だ。そのため他の組織が手が出せないのである。だが虎視眈々と隙あらば狙っているらしい。

それだけ高性能な樹形図の設計者に「一方通行と超電磁砲との戦闘によつて実験の継続は不可能」あるいは「実験の修正が必要」と嘘の予言をさせて壊せば、再演算できなくなり、実験は頓挫して妹達がお払い箱となる。実験から解放されればカエル先生が自身の研究に組み込む形で妹達の身柄を確保し一件落着となるわけだ。

壊しても学園都市の上層部が樹形図の設計者を直してしまつたら実験は再演算されることはないと疑問に思うだろう。しかし、それは不可能なのだ。

それは何故か。考えてもみて欲しい。他の組織は樹形図の設計者を得るために様々なアプローチを行つてゐるはずである。なのに何故宇宙に飛んでいる現物を虎視眈々と狙うのか。例えば樹形図の設計者の設計図を盗んだり、開発者を勧誘または拉致して情報を得、自由に再現したほうが容易ではないのか。勿論外と学園都市の技術レベルから再現できないという問題もある。しかし一番の理由は樹形図の設計者の中枢部の設計図が失われており、もはや再現不可能となつてゐるからである。そのため現物である樹形図の設計者を狙うしかないのだ。

これは逆にいつと学園都市ですら再現不可能といつことにもなる。だから、樹形図の設計者の外殻は頑丈に造られてゐるそうだ。

つまり樹形図の設計者を破壊すれば、学園都市で新たに造り出すことは出来ない。新たにスーパー・コンピュータを造つても樹形図の設

計者の性能からみれば大幅に劣ることだらう。

樹形図の設計者の破壊に関しては人工衛星を操作する。元々人工衛星は遠隔にて操作できる。操作した衛星を大気圏に突入させて燃え尽きさせればいいだらう。突入時の角度を深くすればできるはずだ。

また嘘の予言に関してだが、お姉様なら可能かもしれないが樹形図の設計者を直接操作し改竄させるのは俺では無理かもしれない。だが、送受信センターにある樹形図の設計者との送受信用の端末ならば遙かに改竄しやすいはずだ。樹形図の設計者にあるであろう送受信のログを見ればこんな小細工はすぐにバレるだらうが、肝心のログは大気圏突入にて消滅する予定である。演算結果を操作したかはバレない可能性が高い。

これが今回の作戦の全貌である。

この作戦はタイミングが要求されるものだ。実験関係者から実験の再演算を申請されていなければアウト。申請されていとしても既に演算結果が送られていてもアウトだ。再演算の申請が行われており、尚且つ演算結果は送られていない状況。この状況の時のみこの作戦が有効である。

樹形図の設計者との交信は時間が定められていて、昨夜お姉様が倒れる前にだからまだ交信は行われてはいない。問題は再演算するかどうかの申請が行われているかどうかだ。

それを調べるために近くの研究所を襲撃する。今回は俺の他にも妹達も一緒だ。最初は一人で行くつもりだった。しかし、お姉様のこともあって心配したのか同行してもらうことになった。研究所の警備はゼロではないし、状況によればこのまま送受信センターに向か

うため消耗を防ぐこと、最重要施設のため襲撃も容易ではないからだ。警備は厳重だし運用している人間もいるので制圧するのに一人では無理だと正論で諭されてしまうぐうの根も出ない。

でまあ、研究所に侵入したわけだが。なんというか呆氣なく侵入できた。以前の研究所ならば侵入、脱出にも苦労したのだが、引き継ぎ先の研究所のセキュリティは甘く、潜入スキル持ちの妹達に無効化されていった。

これは憶測に過ぎないが、お姉様が襲撃を繰り返したことにより引き継ぎは防衛力より数を優先させたためセキュリティが甘いのかもしない。

そして研究所の端末から幾つかの情報を入手した。

まず、18000人の妹達が製造段階にあること。つまりあと12日で実験のための二万人集まることになる。

そして妹達が俺達の追跡に駆り出されているようだ。研究所内にいれば一緒に逃げようかと思ったが、こここの妹達も探しに出てしまっているらしい。

最後に申請についてだが、やはり一方通行とお姉様の戦闘は観測されていたらしく既に行われているようだ。よし、状況は想定通りだ。

あとは乗り込むだけなんだが

。

「あの皆さん、それはなんですか？」

妹達の手にはアサルトライフルが。てかなんでそんなものがこんな

ところにあるんですか！？

「一方通行との実験で使用する予定の銃器、F2000Rです。どうやら実験で使用する武装は各研究所で保管されているようです。送受信センターは厳重な警備が想定されるため武装による強化は必須です、とミサカは胸を張つて答えます

「お姉様もどうぞ」

そういわれ手渡される銃。本物の銃つて触ることなんか憑依前でたら無かつたけどプラスチックな材質の銃でなんというか玩具みたいだなあ。現実感が伴わないまま研究所を後にした。

第一三学区、樹形図の設計者送受信センター。立入禁止と書かれたフェンスの前に並ぶ俺と妹達。

さあ作戦の決行だ。

。

第三十一話（後書き）

樹形図の設計者の設定に関しては捏造です。

第二十一話（前書き）

一部修正しました。

名前の間違いと樹形図の設計者の一部を削除しました。

樹形図の設計者の天気予報は一ヶ月まとめてですかね。間違えて
ました。

フェンスの前には小型の警備ロボがいる。不審者と判断した場合、取り囲んで警報を鳴らすタイプだ。最重要施設の立入禁止区域だ、当然厳重な警備が敷かれておりロボやフェンス越しにも赤外線式であらうセンサーみたいなのも沢山みて取れる。

さつきまでは捕まらないよう、地下を通つてなるべくバレないようにしてきたが、ここまでくればバレるのは確実だ。気にする必要なんてない。

「準備はいいか？」

その言葉にみなコクリと頷いた。

「じゃあ 行くぞ！」

アサルトライフルで警備ロボやセンサーをぶち壊し、一気に入口まで駆け抜ける。恐らく中の警備はとっくに異常に気付いているだろう。警報が鳴る前に破壊してるとは言え、次々とロボットやセンサーの反応が無くなっているのだ。一部なら故障と疑つかもしれないが、ここまで同タイミングだと襲撃以外考えられない。

それにしてもアサルトライフルは凄い性能だな。洗脳装置で銃器の扱いには慣れていたが、割と大きな銃なのにほとんど反動がないため非常に使いやすい。別称、オモチャの兵隊トイソルジャーと呼ばれるこのアサルトライフルは名前の通りプラスチックの外見も相まって玩具にしか思えないが、威力を知ればやっぱり本物の銃なんだと実感する。こんなのは実験に使おうとしてたのかと思うと……想像しただけだけど顔は多分引き攣つてんだろうな。一方通行は反射するから当たらないかもしぬなが、跳ね返った弾でこっちがバラバラにされそうだ。それにこの銃に備え付けられたグレネードは使用してないがきっとろくでもない威力なんだるうな。

迎撃に来たであろう警備員は電撃で気絶させ無力化しつつどんどん先に進んでいく。そして交信室にまで辿り着いた。緊張しながら扉を開ける。中には誰もいない。どうやら襲撃に気付いて非戦闘員は避難したようだ。

交信時間まではまだ時間がある。交信させると同時に書き換え、樹形図の設計者を載せた人工衛星「おりひめ1号」を操作するだけでも相当時間がかかるため、その間はここを制圧し続けなければならぬ。15人の妹達が入口を封鎖、死守しつつ俺と残りの妹達が端末を操作、ハッキングする体制だ。

まずは再演算依頼が届いているかの確認だ。端末のセキュリティロックを解除し演算依頼の項目を検索する。研究所で調べた通り依頼は間違なく届いていた。今日申請されたばかりだが上層部の申請は受理されており、交信待ちである。あとは交信時に結果を書き換えるだけだ。

次に衛星の操作を行う。衛星の落下位置や大気圏突入の角度の割り出しを行つた。万が一燃え尽きなかつた場合、街に落下したら大惨

事だからな。落下する場合は海になるように調整する。大気圏に向かうようにセットして準備完了だ。時間にして一時間。そこを過ぎればもう重力により軌道修正ができなくなる。一時間か、割と長く感じるな。一時間はここを死守しなくてはならない。早く時間にならないだろ？

焦りが募る。しかし時間は想像以上に進まない。

そんな時ガリガリと物凄い音を立てながら扉がこじ開けられた。嘘だろ！？電子ロックされた鋼鉄製の扉だぞ？！

扉を手でこじ開けてるのは一人の小柄な少女。そんな小さな体のどこに恐ろしい程の怪力を秘めているんだろうか。いや手じゃない。よく見ると、扉と手の間には隙間がある。どちらかと言えば手に膜みたいなものがあつてそれで押しているのか？となると、いつの能力は空気を操る能力か！？空気を操る能力者いわゆる空力使いは初めて見たがあれだけの力を持つてているとなるとレベルは高いんだろう。

「よつやく見つけました。超大人しくして下さー」

「どうやら追つ手らしいな。こんな子供まで動員するのか。

「研究所からの追つ手か？こんな所までわざわざ！」苦勞さん。つてことで見逃してくれると助かるんだけど」

「私達は超仕事しているだけです。超諦めて捕まつて下さー」

「悪いけどまだ捕まるわけにはいかないんでな。精々悪あがきさせてもらうやせー！」

流石にあんな子供を撃つのは気が引けるが、電撃を当て気絶させたいところだ。妹達は足元を狙い威嚇射撃を行つが少女は弾丸を避けようとする素振りも見せない。

「私の^{オフショルダーバッグ}素装甲に銃は効きませんよ。超無駄撃ちです」

「ううむ、空力使いだから能力的に電気を通さないことはないだろうけど。ならば時間を稼ぐか。

「成る程、その能力は弾丸すら防ぐのか。だから前に出られると。かさつきから超超言つてるけど、今また流行つてんの？大分昔は流行つてたけど」

「使われなくなつたわけじゃないけど、彼女結構頻度高いよね。この世界じゃ流行つてるんだろうか？あるいは超が流行つた世代が親な娘さんだろうか。

「本人を目の前にして流行に乗り遅れないと指摘するのは可哀相です、とミサカは嗜めます」

「流行はまた巡るそうです。このまま続ければ時代の先駆者になれるのではないか、とミサカは希望的観測を述べます」

「流行ではなく個性の追求ではないでしょうか？布束砥信も英語混じりでしたし。多少馬鹿ぼくとも個性は大切です、とミサカは自分のナイスフォローに称賛を贈ります」

「いやいやお前さん達そこまで言つてねーし、それフォローでもなんでもないから。というかダメ押しだから！なにそのミサカジェット

ストリームアタック！こつかはばつぐんだ！みたいなんですけど！なんか相手プルプル震えているんですけど！口をキヨツと閉めてなにかを堪えるようにプルプルしてるんですけど！ヤバいなんか小動物系にかわいいー！嘘虐心がそそられますね。…………うんなんか俺。

「…………うん、なんか「ゴメン」

「…………ツー」

なんか嫌な予感が…………つてオイ、あのその壊れかけの扉を剥がしてどうする気でしょ！うか？あーなんとなくわかるんですけどね。

「フンー。」

掛け声と共に飛んで来る鉄の塊。やつぱ投擲かい！ぜ、全員退避ツー！！

?ーつてこんな場所で避けたらーああ、つー！

おまけ

開かない扉。その前に金髪の少女
いた。

フレンダ＝セイヴォルンが

「どうしたの？フレンダ」

ピンクのジャージ姿の少女 滝壺理后が声をかける。二人は学園都市の暗部「アイテム」の構成員である。

「実は絹旗が出てこないのよ」

絹旗最愛。彼女もアイテムの一人である。先日、とある依頼を受け研究所を防衛していた。しかしアイテムの下部組織の一人が研究所の実験動物に発砲し逃走されるハメに。責任を取らされる形で逃げ出した実験動物を探すハメになつたのだが……。話を聞く限りその実験動物に口調のことでバカにされたらしい。まさかこんなことで落ち込むとは思わなかつたが。

フレンダは小声で事情を説明すると滝壺は徐に扉に向かって声をかけた。

「大丈夫だよ、きぬはた。例え口調が変でも私はそんなきぬはたを応援してる」

ピシリと空気が凍り扉の奥から重い空気が漂ってきた。

「滝壺、結局それって追い打ちな訳よ……」

外伝 とある虚無の完全調整（前書き）

本編がなかなか進まなくて、ちまちま書いていたネタです。クロスオーバー作品なので苦手な人は飛ばしてください。

本編終了後の話になり、一二万人の妹達生存ルートです。

続くかどうかは未定です。

あの死亡フラグ乱立した事件から半年以上過ぎた。季節はもうすっかり夏である。半年も過ぎたから少しだけ髪も伸びた。今は束ねている。完全な自由の身というわけではないが、命の危険が無くなつてようやく手にした平穏？な日常を噛み締めている。

妹達は百人ほど学園都市に残ることになったが、その他は皆外部の研究所に行つてしまつた。寂しいとは思うが仕方ないのも事実だ。薬物によつて無理矢理促成された成長は確実に寿命を削つていた。時間にしてあと10年。決して永くはない時間を延ばそうとカエル先生が尽力してくれたおかげで治療の日処が立ち、そのため各地の研究所で治療を行つているのだ。治療の代わりに色々とデータを渡してギブアンドテイクの関係とは言え、カエル先生にはほんとに頭があがらないわ。

今日もそんな治療の日だった。

「うん、経過も順調だね。むしろ予想以上かもしないね？」

「そう？…なら早く治るかな？」

「そうかもしないね。ただあと一、二年は継続して治療しないといけないよ？」

まあ直ぐさま治るなんて思つてはいない。けど思つてたよりは短いな。

「じゃあ今日も培養器での治療を行うよ。使い方は大丈夫かな？」

「うん、大丈夫。何度もやつてるしね」

「じゃあ僕はもう行くからね。しつかり治療していくんだよ?」

「ありがとね、先生!」

カエル先生が去つて、培養器の操作をする。準備ができると培養器に入るため脱ぎうと服に手をかけた。

その時だった。異変が起きたのは。

「ん?」

急に目の前に白く発光したものが現れたのだ。見たこともない光景に思わず首を傾げてしまう。なにかスイッチを押し間違えたのか?あるいはなんかの能力なのか?取り合えず触つてみるか?意を決して触つてみた途端、急に中?から急に強い力で引きずり込まれた!

「なつ?...つわあああああ」

目を覆うような眩しい光に包まれ思わず目をつむる。しばらく目を閉じていると何処からともなく声をかけられた。

「あんた誰?」

目を開けるとそこにはピンクブロンドの小柄な少女がいた。ブラウ

ス、スカート姿をみると学生っぽいが見覚えがないし、マントをつけているし。でかマントって。ハロー・ポッターじゃあるまいし。

「えーとミサカ〇〇〇〇〇〇号って書つんだけど」

「どこの平民?」

「ルイズ、サモンサー・ヴァントで平民を呼び出してどうする」

誰かが言うとルイズと呼ばれた少女はやいのやいの言い合ひを始めた。んーそれにもここは何処なんだ? いつの間にか外にいるし、大きな建物があるとはいえ、学園都市では滅多に見かけないようなレンガ作りだ。辺りも自然に恵まれており学園都市でお目にかかる風景ではない。

もしかして オカルト的な現象に巻き込まれたので思い付いたのだが、まさかまた誰かに憑依したのか? 思わず体を確認するがどうやら体は変わっていないらしい。この体の彼女の意識も感じられる。能力は 咄嗟に演算して確認してみるとすちゃんと電撃は放てるようだ。

となると、これは転移? あの光のせいか? とにかく情報不足だ。他の妹達に連絡が取れないだろうか? ミサカネットワークは……大丈夫だ! まだ使える!

(メーデーメーデー。なんか白い光に触れたら知らないうちに外国に飛ばされたっぽいんだけど)

(お姉様大丈夫ですか主に頭が、ミサカは心配します)

(とか怪しいものには手は触れないようにしたほうがよいので

は、ヒミツカは忠告します）

（辛辣なお言葉ありがとつ。取り合えず位置はわかるか？）

（…地球上の何処にもお姉様の存在を確認できませ、ヒミツカは驚愕の事実を報告します）

わお異世界転移かよ。学園都市が知つたら大変ですね。

（白い光に触れたら移動したのですね？ヒミツカは確認を取ります）

（ああ多分そうだと思つ）

「ちよつとあんた聞いてるの…？」

ルイズに会話を遮られた。

「「めん」「めん。 でなにかな？」

「あんた、ほんとにゲートをくぐつてきたの？…」

ゲートへさつきの光のことだらつか？

「ゲートがなにかわからないけど、白色の光に触れたら途端に飛ばされたんだ」

「じゃあ事故で飛ばされたのかもしれないわね。だつて」

ルイズはさう言つて俺の背後を指した。

「まだゲートは開いているんだもの」

さつも見かけたものと同じ光がそこにあった。

もしかしてこれに触れたら帰れるのか？と思つて触れたがどうやら一方通行らしい。がつかりだ。

「お、またなにか出でぐるぞ、また平民じゃないのか？」

「うつさいわね！あんたなんかよつよつほど凄い使い魔出して見せるんだから！」

使い魔といつのも聞き捨てならないが、びつやり回りはルイーズのことを馬鹿にしてくる雰囲気だ。イジメカツ「悪い。

光の中から「う」めぐものがある。人型ぐらいいだらうか。中から出できたのは。

「お姉様無事でしたか、とミサカは役得とばかりにお姉様の胸に飛び込みます」

ミサカ2514号がさつと飛び込んできたのだった。

でだ。光の中から出でてきたのは彼女だけではない。まあ結論からいふと一万人。打ち止めを除く全妹達の前に白い光が現れたらしい。

中には作業中の妹達もいて、バンなどの乗り物に乗っていた妹達までいた。一部は俺の危機を知つて武器まで持つてきているやつまでいる。広い場所ではあつたが、二万人も集まればすごいことになるわな。東京ドームの動員数が五万人だから、半分近くは埋まるぐらいの人数だ。お互に調整し移動しているとはい、ゲートから軽い渋滞を起こしている。どうにか落ち着いたのは一時間ぐらい経過してからだ。二万人が通ると光は役目を終えたかのように消えた。流石に回りの異世界人は唖然としていた。ただ一人その場にいた唯一の大人である中年のコルベールという男はその寂しい頭のように目を輝かせて見ている。

「ややつ！あの鉄の馬車はなんなんだ？乗つてるのは君に似ているようだが、なにか知らんかね！」

「乗つてているのは俺の妹で鉄の馬車は自動車と言つて割と一般的な乗り物です」

あんまり興奮気味に問い合わせてくるから、律儀に答えてしまった。

「なんとあんなものが一般的に使われてているのかね！？君の故郷は随分と凄いのだな」

コルベールの興奮度はMAXである。

（お姉様、気になることがあります、とミサカは報告します）

（ん、どうした？）

（ゲートと呼ばれる光、状況、ルイズ、それにコルベールと呼ばれる人物なのですが……非科学的ですが状況に酷似した物語を読ん

だことがあります、ミニサカは記憶を掘り起こします）

（物語？）

（はい、ネットワークで情報を共有します）

ネットワークにその物語が共有される。……なるほど。確かに似ているな。確認してみるか。

「あのミスター・コルベール。もしかしてここは 魔法学院？」

「ええ、その通りです」

疑惑が確信に変わった。 「ここは『ゼロの使い魔』の世界らしい。」

二万とんでも一人の使い魔候補を召喚したということで、大事になり学園長室に呼ばれることとなつた。といつても俺とルイズの二人だけだが。ルイズの表情は複雑そうだ。ただ単純に怒つていたりはしていないようだが。

「で君達は一体何者なのかね？二万人も同じ顔の人間がいるのは不思議じゃからのう」

そう話かけてくる老人。この人がこの学院の学院長である。どうしたものかと考えたが、まあ正直に話すしかないか。物語の世界に来ましたってのは伏せるけど。

「つまり君達は人工的に造られたメイジのよつた存在なんじゃな」

「はい。学園都市では超能力 まあ魔法みたいな力を研究していく、平民でもメイジみたいなことができるようになるんですけど、その中でもトップクラスに強い人を素にして造られたクローン エーとこっちだとスキルールの人間版みたいなものかな。人間なんで自分の意志はあるんですけどね」

スキルールとは血を引えるとその相手の容姿・能力になる魔法の人物のことだ。

「では君はスクウェアクラスのメイジといふことなのかね？」

スクウェアはメイジの能力の力量を表す。正確に言つと、この世界の魔法は火、水、土、風の四属性あつて、魔法はその属性ん一度にいくつ足せるかで性質、威力が変わつてくるらしい。一つ使えるとドット、二つ使えるとライン、三つ使えるとトライアングル、四つ使えるとスクウェアとなる。つまりメイジの最高位はスクウェアなわけだ。

「実際スクウェアがどの程度かわからぬのでなんとも。まあ、できることはこんな感じに電気 まあ雷を操る能力なんです」

バチバチと手に電撃を纏わせて実演してみる。同席していたルイズやコルベールは驚いて目を見開いているな。

「でダメ元で聞くんですけどやつぱり元の世界には帰れませんか？」

物語に酷似しているだけであれば「帰ることはできないだろ？」

「ふむ……難しいの？ サモンサー、ヴァントはあくまで幻喰するのみじゃからな」

やつぱりダメか。多少落胆はするが、まあ無理の可能性が高かつたもんなあ。

「どうして戻る？ するのよー。」主人様を置いて帰るつもつ？！

ルイズが叫ぶ。いつの間にか彼女の中では俺は完全に使い魔になつてこらへじ。とは言えこれは言つたくない。

「なによ！ ハッ キリ言いなせー！」

言い淀む俺に迫るルイズ。一つ溜息を吐き正直に答えた。

「人工的に造られた関係で俺達は寿命が短い。なので向こうでは延命治療を行つてたんだ。だからその治療ができないと 10年以内に俺達は死んじゃうんだよ」

学院長室を退出する。あの後は二万人でどうやって過ごすか話し合つた。一応使用人の空き部屋を使わせてもらつたり、仮設の家を土メイジが建ててくれるらしい。ルイズの顔は青いまま。まあ自分

の召喚で人の命を短くしてしまったとなると流石にキツいだらう。

「…………『ゴメンなさい』」

いつの間にか立ち止まっていたルイズがそう呟くように言った。

「まあ気にするなって。きっと帰る方法が見つかるさ」

原作では向こうの世界に帰る魔法があったはずだ。ルイズの真の力が目覚めればなんとかなるはずである。だからどうちかといふと俺はさつき正直に話したことのほうが心配だった。

「あんな重い話しされたら誰だって罪悪感に駆られるわな。ゴメンなルイズ。まあ、世界には帰還する魔法があるかもしないし、別の治療方法もあるかもしれないし。ただ俺達だけじゃこっちの世界ことわからないしルイズの力を貸してくれないかな?」

「…………私の力?でも私はメイジとしては落ちこぼれで…………魔法だつて失敗するし、今日初めて成功したのよ」

「いや凄いさ。だつて二万人も召喚したんだぜ?魔力か精神力かはわかんないけど、ああいうゲートを維持するのつて大変なんじゃないの?なのにケロッとしてるしさ」

言われてハツとするルイズ。やっぱり維持にも魔力を使つらしい。

「きつヒルイズは凄いメイジになる。だから力を貸して欲しい。俺達も以前は欠陥品だつて言われて酷い目にあつたけどなんとかなつたしね」

「…………わかったわ。必ず元の世界に帰してあげるー。」

「ねへ、その意氣やー。」

「…………して俺のハルケギニア生活が幕を開けたのだった。」

番外一（前書き）

ほのぼのの回です。本編には全く関係ありません。

話は過去に戻り、最初の話は量産型能力者計画のとき、二つめの話は14～15話の間の話です。

とある日常の完全調整

スーパー・マーケット。略称スーパー。

高頻度に消費される食料品や日用品など取り扱う店のことである。スーパーで手に入る食材は基本安価なものが多い。一重に安価といつても食品でも青物や肉・魚類などは特に季節などの時期的な要因やその他外的な要因によって値段が上下する。前日が安いからと言って今日が同じ値段とは限らない。また、店舗によってはタイムセールといった特定の時間に割引を行うこともあるのだ。

いいものをいかに安く買つか。これはチラシの入念な情報収集と店舗に足しげく通つて培つた経験がモノを言つのだ。

これは半額弁当を巡つて争つことはなく、割と平凡に安いものを求めスーパーに通うとある少女の日常を描いた物語である。

憑依前は親が共働きといつることもあつてか基本料理をしなければならない環境だつた関係で多少なり料理ができた俺。今ではそのスキルを活かして妹達のご飯を作る毎日である。

……なんだかなあ。とはいって、いじじや口クな娯楽もないから料

理は楽しいし、無表情ながらも喜んでいるらしく美味しいと言つてくれるのは嬉しいんだけど。そんなわけで、5人の妹達のために食材を買いに行かなければならないのである。

まずは情報収集だ。お店で直接見てもいいのだが、俺の場合はチラシを見て献立を考える派だ。端末からネットにアクセスし情報をゲットする。

学園都市は実験都市のよつなものだ。それは超能力といった不思議能力だけじゃなくありとあらゆる分野で発揮されている。それは食料品も例外ではない。

例えば野菜。普通は外で育てたりビニールハウスで育てるイメージが強いだろうが、学園都市産の野菜はビルの中で生産を管理されているのだ。品種や生産方法の科学的な実験を行つていてるそうだ。実際の農業も科学的な見地は切り離せないだろうけど完全管理体制な製造は異質に見えるんだろう。

憑依前の記憶がある俺としてはそれって大丈夫なのかと思つけど食べてみたらとても美味しかつた。無農薬とか有機栽培だとかのほうが美味しくて体にいいんじゃないかと思つてたけど、そんなことはないのかもしれないな。ちなみにそういう野菜も扱つていてるが、外部から取り寄せているためかやや割高になる。値段のこともあるが、安全性で学園都市産のほうがここでは人気があるみたいだ。逆に、学園都市産の野菜はまあイロイロいじくつたものだから外部では受けが悪いみたいで、学園都市内部での販売のみになるが。

脱線したがとにかく食料品は安いので田移りしてしまつ。元々貧乏性だからなあ。今日は卵と鶏肉が安い、特に卵は2パックでまとめるとなお安い！ふむ、卵と鶏肉か……親子丢とかいいな。甘辛い

かんじで。 こう味の染み込んだ鶏肉から染み出る肉汁、あつあつの
ご飯 ゴクリ。

よし決まった。早速行こうか、スーパー（戦場）に。

で、スーパーに到着。店内には学生が多い。学園都市の学生の比率が高いものもあるけど、基本学生は寮生活で自炊が必要な人もいるからね。学生でもたまにメイド服な人も見かけるよ？なんかメイドを育成する学校があるんだとかないんだとか。元の世界ではメイドなんてメイド喫茶ぐらいしか見たことなかつたけど、こちらでは割と珍しくないようだ。

そうそう珍しいと言えば前に小学生ぐらいの大人を見かけた。誤字ではない。本当に見た目が小学生2～3年生みたいな大人だったのである。ビールを購入するときに身分証見せてたけど、店員の引き攣った表情は忘れられない。あの体で成人しているんだから、普通に歩いても補導とかされそうだ。

お皿当てのものを見つけ、思わず取つたビー！とポーズを取る。なんか視線が集まつた、少し恥ずかしい。気を取り直してお支払い。ちなみにカードで支払つてます。天井曰く必要経費で落ちるらしいけど詳細は知らん。無駄遣いには気をつけているけどね。

不幸だ

スーパーから出ですぐ、一人のツンツン頭の少年が溜息をついてた。右手にはさつきのスーパーのレジ袋。中身はぐしゃりと型が潰れてしまっている卵パック。どうやら落としたらしい。左手には小銭が見えるが、1パック買うにはお金が足りず、まとめ買いした1パック分の予算しかないようだ。

ふむ。まあ六人分ならば1パックあれば十分か。

「ありがとうございました！」

「いやいや気にしないで」

何度もお礼を言わると恐縮するなあ。しかし喜び過ぎじやないか？泣くほど嬉しかつたらしい。もしかすると苦学生なのかもしけない。無能力者は奨学金低いらしいしなあ。

まあでも良いことした後は気持ちいい。鼻歌混じりに家路につくのだった。

とある下着の完全調整

「あのや、聞きたいことがあるんだけど」

「どうしたんですか、00000号?」と、ミサカは首を傾げて問い合わせる。

ます」

「今度の実験で生まれる妹達の下着つて芳川つて女人が注文して
きたらしいんだよね」

「やうらしいですね」

「 なんで縞パンなんだろ?」

「それは安かつたのではないでしょうか。最も無地のほうが安いよ
うに思えますが、とミサカは疑問を抱きながら答えます」

「まあ結局選んだ人のセンスなんかね。……ちなみに俺達も縞パ
ンなんだよね」

「芳川桔梗は今回の実験から参加したのですから、この縞パンは前
の実験で別の人気が選んだということですね?とミサカは」

「……天井が選んだらしい」

「……」

しばらくある研究員は縞パンフューチとまじとしゃかに囁かれるよ
うになる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8634w/>

とある科学の完全調整（フルチューニング）

2011年11月20日04時25分発行